Sakuma, Kanae
Onseigaku Onsei shinri
gaku

音声学

音声心理学

佐久間 鼎

Sakuma, Kanae
Onseigaku Onsei shinri gaku

Ea

Not yet

國語科學講座

—Ⅱ—

音聲學

音聲心理學

佐久間 鼎

株式會社
明治書院

目次

音聲心理學

佐久間　鼎

一　言語と音聲

言語の學習は、各個人の兒童期のはじめに當つて遂げられ、身體の發育、精神の發達と平行して言語の使用の能力も進歩するが、言語の使用以前にも、話しかけられた言葉を理解することは、すでにかなりの程度で行はれる。これが言語使用を可能にする豫備段階として必要なことは、容易に想見し得るところだ。シテルンによれば、初めて自分で話し出す時期が幾分遲れてゐるやうな子どもの場合には、この言語なしの言語理解の時期が相當に長いが、これを一般的にそれほど長いと認めることには贊成しがたいといふ。* しかし、シェーフェル (*P. Schäfer*) の特殊研究の示すところによると、この「純粹言語理解」の時期は、平均三箇月に及ぶといはれるし、その他の例にあつても、二―三箇月を數へるといふものが少くない。もちろん、その當初の理解は、はつきりした姿のものでなく、「ぼんやりした音聲印象への單純な運動反應」に過ぎず、その際話しかける者の身振や顏面表情によつて助けられるのでもあらう。

* *C. u. W. Stern*: Die Kindersprache, 4. Aufl, 1928, S. 163—169.

とにかく、子どもはこの時期から以後、「一語文」の使用によつて特色づけられる兒童語*の第一期（そのはじめは平均生後一年乃至一年三箇月で、一年六箇月に及ぶ）、意味が感得されはじめ、物にはそれぐ〵名があるものだといふことが知られて、言葉を用ゐようといふ意志のはたらく第二期（一年六箇月から二年）、用言の活用が次第にあらはれ、各種の文形式を用ゐられるやうになる第三期（約二年から二年六箇月）、複合的な文構成を見るに至る第四期（約二年六箇月以後）の段階を經て、言語發達を遂げたのち、つひに成人の言語圈内に入る。その後のいはゞ成人語は、人の一生に亘つてその役目をつとめる。かうして、人は、何人もその一生涯を通じて言語の使用をつゞけ、日々その利便を享受し、大いにその恩惠に浴する。

* 「兒童語」とは、最初の含意的に話された語から文構成の重要な各種形式の驅使に至るまでの言語時期をいふ（シテルンの定義。Die Kindersprache. S. 3）。

社會生活のいづれの斷面にあつても、人と人との交渉のあるところ、かならず言語が重要な役割をつとめてゐるのを見る。普通に言語といへば、音聲機能によつてその使命を果す種類のもの、すなはち「音聲言語」を指すわけだが、言語發達の時期に際して音聲聽取の性能を缺き、從つて音聲による言語を與へられる機會がなくて、つひにこれを習得しなかつたやうな人々、すなはち聾啞にあつても、その社會生活を遂げるためには、とにかく言語の任務を營む代償的機能を見出さないではゐられない。その代償的作用は、もちろん、すこぶる不便かつ不自由なものではあるが、とにかく言語の代用をするといふわけだから、とにかくこれも一種の言語として、「身振言葉」などゝ名づけられてゐる。これは、言語機能の本質的なものに着眼して原理的に考察するとき、相當の程度における是認を與へられる次第

だ。かうして、言語は人間の社會生活にとつて、どうしても缺くことのできない要件となつてゐる。

ところが、人間にとつてだけの問題ではないといふことも、眼界をひろげて見ると、ぢきにわかつて來る。いやしくも社會的・集團的生活を營むものに取つては、それ〲の進化段階における動物にあつても、それ相應の「言語」が、すなはち交通・通信の手段が必要なのだ。ここに「言語」とは、何等かの交信の手段としての意義においていはれるわけだ。事實それ〲の交信の手段をもつことは、社會生活をいとなむ昆蟲、殊に蟻や蜂について、仔細に觀察されてゐる。すなはちフォン＝フリッシの興味ゆたかな觀察が示すやうに、通信の手段としての「蜂の言葉」は、特定の運動樣式「蜂の舞」の方法を以て、その實用價値を有効に發揮するやうな次第だ。*

* K. von Frisch: Aus dem Leben der Bienen. 1927. S. 82— „Wie die Bienen miteinander reden."

その根本機能において、「言語」は人類の社會生活に特有な文化財といふだけのものでなくて、もつと根づよい生物學的重要義、生活への要請をもつて發現して來たのだつた。「言語」の——あるいはお好みによつて「言語活動」のといはう——本然の使命は、そこまで深く掘り下げていかなくては、本當に理解することが出來ないやうなものだつた。

かういふ具體的な、實際的な任務を帶びてゐる言語は、いつもその發達しきつた、整頓した形式で話されるものではない。むしろ往々すこぶる斷片的な、首尾の整はない姿で出て來る。特に日常生活の具體的な音聲言語においてさうだが、語法的には何らまとまつてはゐないが、それでゐて、その意味するところは直下に端的に受取られていくといふ場合が、すこぶる多い。

その生活に卽して發せられ、語られる實際の言語は、それ自體生活の一部なので、それの全的理解は、またその事

態の内面的把握によつてはじめて遂げられる底のものだ。言語がその出發において行動に外ならず、かうして行動全體の一齣として全體の背景を脊負つてあらはれ、その全體の分節支として、成員として、然るべく體制的全體の中に「する」られ、ぬきさしならぬやうにその中に位づけられてゐるが故にこそ、乏しい語句の直下の理解も可能になる。「眼が口ほど物いふ事態の全景こそ、その理解を可能にするところのものだ。*片言隻句の生きるのもそれによるし、「眼が口ほどに物をいふ」のも、またこれによる。さらに、誤解がどうして生じるかを知るためにも、シャレの説明も、この邊の考察にまたなければならない。それは、一般に他人の行動への、また「他我」への同感的理解の場合についてと同様なものだ。

* この種の心理學的見地について何等かの異様さを感じる讀者に、筆者の『ゲシタルトの問題と學説』第一輯『ゲシタルト心理學の立場』または、ケーレル著・佐久間譯『ゲシタルト心理學』の通讀をおすゝめしたい。

今こゝに、音聲との交渉において言語を説く場合に、言語は必然本來の意味のものに局限されるわけで、すなはち以下專ら音聲言語を、その發音された具體的の姿において問題とする次第だ。この具體的な姿における話された言葉の實際的な理解にあつては、音聲は原理上相互に趣を異にする二通りのはたらきをする。すなはち、一面直接に話し手の心的狀態を表白する、あるいはむしろ反映するといふべき役割をつとめると共に、他面、間接にいはゞ意義を荷ふ語句の姿づけを營む。前の方のはたらきを名づけて「表出的機能」とすれば、これは音聲の變化、特にその緩急や強弱や高低の進行樣式によつて營まれるもので、むしろ後者の含意的言語を荷ひ運んで、その「演述的機能」を發揮させるはたらきと原理上十分區別されなければならない。

話されたまゝの具體的な言語をいつも考察の出發點におく事實的攷究は、かならずや上述の二方面に對し、それぞれ應分の顧慮を拂ふはずのもので、いづれも閑却すべきでない兩側面を成す所以を十分識認しなくてはならない。ところが、文獻學的・比較語法學的・語源學的な諸研究から得るところが多くて、主として一個の現象形態として、文化財としての言語を眼中におき、その言語の史的變遷の迹を辿ることを以て研究の本筋としたやうな在來の言語の考察は、音聲をもつぱら言語における形式的方面とし、語義をその內容的方面として大別し、さらに音聲の側面をもつぱら物理的・生理的に說明し得るもの、意義の側面は心理的に取扱ふべきものとするにも至つた。話された言語の具體性に想到せず、「言語活動」を多く顧慮しないで、もつぱら書かれた言語の文獻學的・考證學的取扱に偏するとき、音聲の前述したやうな方面における重要義を看過する。この邊にも從來の言語研究者の不當な評價と手ぬかりとを認めることができる。

　言語の論究において、音聲と意義との二方面を分け、この二者の相互の關係を形式と內容との對立として考へていくのは、なるほど手近かに考へ易い、そして一應尤もなところもある考へ方といふことも出來よう。そしてこれは言語學者にとつて常套なものとさへなつてゐる。だが、この考自體に一種の圖式的・論理癖的なものがついて廻つてゐる嫌があり、言語問題の考察の第一着手として便宜上からいふ考へ方で步を進めるとしても、いつまでもこの程度に彷徨してゐるのは、適切な行き方といはれない。もつと具體的に、事理に卽して進むべきことが、言語事實の原理的な解明のために要望されると思ふ。この第一次的概念構成は、すこぶる簡明にはいつてゐるが、また甚だ平板だし、あまり一面觀に囚はれてゐる。どこまでもこれに固執していくとき、その大まかな考察の網の目から意味ふかい具體

的なものが脱け出してしまふ。

從來の言語研究において、「表情音聲」すなはち表出的機能を營むとしての音聲乃至話言の重要な役割に對して、適切な考慮が拂はれなかつた嫌があるのも、最初から意識して問題を區別し、それを考察の範圍から除外するといふ方途に出たからなのではなくて、むしろかの音聲形式觀の先入見から由來したのだと思はれる。

さらにまた、音聲言語の現象と機能とを考察するに當つて、最初からいはゆる形式と内容との二方面を峻別して、あたかも相互にかなりの程度で没交渉に考察を進めて差支ないかのやうに取扱ふのは、論究の便宜上許さなければならない點があるとしても、その考へ方の形式論理的操作の結果は、往々具體的事理とすこぶるくひちがつた推論を導き出すに至るおそれがある。音聲の徹底的な形式視は、音聲をあらゆる内容的なものから切離してしまふ。古來しばしば繰返されて來た「音義說」のなかには、事實上、すこぶる荒唐なものの多いことが指摘されなくてはならないとはいへ、一方幾許か眞理を含むところのあることが認められるのは、すなほな物の見方をする人たちの首肯するところだらう。が、徹底形式觀に立脚するときは、さういふ容認の餘地も與へられない。

研究の進捗のある段階において、所見の諸事項の解明のために設定された第一次的概念構成は、爾後の所得によつて豐かにされた知見の進程において、つねに吟味され改訂されていくべき運命をもつ。發見の當初は、片々たる孤立無援の新事實たるに過ぎないやうな、あれやこれやの觀察事項も、一たび批判的精神を發揚してこれを原理的觀點から眞面目に取上げるとき、しばしば深く理論の全般的更改を要求する底の勢を得ることがある。

この批判的精神の缺如は、既成理論への姑息な信頼の方へ導く。當初考察の一應の便宜として、また理解の可能的

な一方便として採用された構想が、いつとも知らず次第に枝葉を附加されて、一見根ざしの深い欝然たる大樹の觀を呈するに至ると、さうした思想體系に納まらない新しい個別的事實は、ややもすればこの既成體系の法律的威力に壓倒されるに及ぶ。かうして最初の豫想を支持するために、さらに補助假定を追加して進むのが、學問の傳承について往々見受けられるところだが、かういふ無批判な事大的態度は、科學の進歩を沮み、つひにその發展を抑へるものに外ならない。

常に具體的なものに對して十分な顧慮を拂つて進むのが、科學者の當然の用意なのだが、この用意を忘れて考察の興味をもつぱら自足的體系の樹立に見出すとき、單に論理の圖式的操作が營まれ、かうしてその目標たる體系に到達して滿足を得ることは出來るが、科學そのものはそこに停滯する。科學はこゝにその本來の正當な行程を踏み迷つたわけだ。實證されず、事實に即しない體系的結構はこゝに思想の上で出來上るにしても、それは具體的事實に當面するに及んでは、何の効用をもたらさず、もろくも破碎されずにはゐない。

まづ言語・音聲の現象に着眼し、事實に立脚し、進んでその中から事理を發見するといふ方途に向つて、最初から出直すことが、この際すこぶる必要だと思はれる。

二　音聲的表出

人はその日常生活において、徹頭徹尾人間的環境に沒頭してゐる。自然界が彼の周圍をめぐり、非情の物が四邊を圍んでゐるにもかゝはらず、彼の興味は、人間の世界を中心として動いてゐる。物もそれ自體存在する自然物として

人間の前にあるのでなくて、まづ第一に彼の欲求の對象として問題にされる。殊に原始的心性について見ると、この事が著しい。動物や未開人や子どもの一擧手一投足は、いづれも各自の生物學的な要求、また原始的心性の情意から出てゐる。

人間行動の原動力は、究極その生活的要求に根源する本能にあるとされる。だが、元來本能の概念には、すこぶる曖昧なものがある。それでは、行動を發現させる所以の動力を、どういふものと考へればいゝか。問題は心理學・生物學の原理的なものに觸れるから、こゝに立入る餘裕はないが、とにかく内面に存するある種の動力を想定しなくてはならない。そして、これが單に遺傳的・生得的なものでなく、のちに獲得されたものをも包含するところから、それぞれの行動と複雜な發生關係を示すやうな、幾種かの「傾性」として一應指定することが出來る。

この内面的動力は、それ〴〵の機に應じて外面にあらはに發現する。傾性自體は、いはゆる潛在的行動なのだが、そこに外的事態に觸發されて、多樣な樣式をもつて外に見える・聞える外部的行動または變化としてあらはれる。その見えたまゝの行動樣式などにおいて、人は他人の内面的なものを窺ふことが出來ると信じてゐる。

これを人の意識的經驗に直接に感得されるところから名づければ、種々の「心もち・氣分・感動」等々に外ならない。これを總じて感情生活といひ、情緒的經驗といふが、それ〴〵の主觀にとつて主要な事態に際會し、潛勢力たる傾性が發現して生じる感情生活の著明な經驗的抑揚が情緒で、その特色において、これは心理的ならびに生理的な一般的惑亂を示すが、それの外面へのあらはれが、「表情」または一般に「表出」といはれる。「よろこび・いかり・おそれ・なやみ・おどろき」などといはれる狀態について、容易に上述の特性を見出すことができる。

普通には情緒といはれない心的狀態乃至活動も、それぐ特性的な表出を伴ふことがある。いはゆる、注意の狀態や、專念あるいは放心の狀況や、また「ハハア體驗」"Ahaerlebnis" の模樣などは、かなりはつきりした表出を示す。*

* *J. Fröbes*: Lehrbuch der experimentellen Psychologie II³, 350—365. 春日保「Aha-erlebnis の呼吸徵候に關する實驗的研究」(心理學論文集 第三〔昭和六年〕、三五三—三五四。)

在來の心理學では、一方情緒と他方表出との間にどういふ因果關係があるかについて、意見の相違があつた。常識的にも考へられるやうに、まづ情緒的經驗があつて、その結果として表出が隨伴するといふのが普通の考へ方だつた。これに反對して提出されたジェイムズ・ランゲ説は、簡單な形で述べられるために種々の誤解を招くが、學說としても長所と共に短所をそなへてゐる。が、情緒的經驗は、今日の更新された心理學の立場から見れば、要するに前に述べたやうに、特定の事態に觸發されて內的動力たる傾性の特性的經過をとつて顯現するところに外ならず、情緒はその內面的なあらはれ、すなはち意識現象だし、表出はその外面的なあらはれで、情緒的行動として他人に知られるといふわけになる。內的テンポがさながら行動樣式に具現される*といふのが、この邊の事理をいひ得たものだらう。

* 「かなり一般的に、情緒的なり、理知的なりの內面的過程は、ある種の發展の型を示すものでして、それに名づけて普通音樂上の進行についていはれるクレシエンドやディミヌエンド、アッチェレランドやリタルダンドといつていゝでせう。これらの性質が聽覺的經驗の世界に生起するやうに、やはり視覺的世界にも見出され、それで直接に觀察し得る活動の中に同樣な內面的生活の力學的風姿をあらはすことが出來ます。相手方の不愉快な態度について考へてゐるとき、たまぐ歩みを速めるのに氣がつかない者があつたでせうか。この場合でも內面的のテンポや力學的水準の增大に對して、目に見える運

動においてもクレシェンドとアッチェレランドとが對應してあらはれます。もちろん、その同じ内面的發展は、聽覺的にも音聲のアッチェレランドとレフォルツァンドとしてあらはれることが出來ます。」――ケーレル『ゲシタルト心理學』（佐久間譯、昭和五年刊）、二三一。

こゝに音聲活動は、もとよりこの廣義の行動の一部を成すもので、音聲の流出の姿において情緒が反映されるといふのは、如上の緊密な相即の事理に徴して當然ともいへる。すなはちこの際にもいはゆる感情生活だけに限らず、また一般に心的狀態および活動のあらはな表白として、音聲の運動および變化の様態が特性を示す次第で、これを他の機能を荷ふ點に着眼しての音聲言語と區別するために、「表情音聲」*といふことがあるが、普通にいふ情緒の表出だけに局限されないことを注意すべきだ。

* 佐久間鼎『音聲言語と表情音聲』（心理學研究第五卷〔昭和五年〕第二輯一一三―一三三）參照。

かうして内的狀態または内的過程の外面的な表白として考察される音聲的表出は、ひとり人間の場合だけでなく、ひろく生物界の普遍的な事實として、生物學的殊に生態學的觀察によつて、幾多の例證を與へられる。わたるところが廣く、根ざすところが深い生物的事象たる所以が、ここにも想見される次第だ。

人間以下の動物にあつても、人間社會において見られる模倣を以て目すべき音聲の出し方を見ることが出來る。それは「人まね」をするといふ鳥の場合に認められる。しかし、その他の場合、すなはち、ほとんど一切の音聲發生は、動物にあつては元來表出的のものに外ならないとすることが不當ではあるまい。すなはちいづれも内面的衝動の發露といふべきもので、何の造作もなく自然に流れ出るといふ趣を示す。その原動力はもとより内的傾性に存し、その展

開の姿はすなはち内部における生理心理的狀況動靜を反映するもの。動物の發する聲の樣子によつてその欲求するところを知ることが可能なのは、すなはちこの事理にもとづく。

もとより諸種の動物にあつては、音聲器官の分化發達の程度において異なりがあり、發聲の容易に行はれるものとすこぶる不如意なものとが分れるわけで、平生ほとんど發聲をしないやうな、「だまりや」の動物もある。兎のごときは、聲を出すことがないやうにも思はれる程だが、ひどい苦しみに遭ふと、平生つかはない發聲器官がつひに聲を立てるに至る。堪へられない苦しみに、殊に恐ろしさをも加へた事態に直面するとき、辛抱づよい牛や馬も、すさまじい「うなりごゑ」を立てる。止むに止まれない、こらへきれない、といふ生理心理的狀勢の迫出に際しては、この種の表出の必然性が、ほゞすべての動物について看取される。

自然界の豐麗な色彩は、植物の性的いとなみにもとづく、花のくさ〴〵によつて代表されるが、天然の明朗な諧調は、動物の雌雄の交歡を誘ふ「さへづり」すなはち「うた」*を以て第一とする。それが鳴禽類などにおけるやうに「うた」*と名づけられるほど旋律的な姿を備へるに至つても、その職能はむしろ抒情的であつて、擬人的な表現がこゝに許されるとすれば、止むに止まれない内心の纏綿の情をうたひ出すといふ風情のものだらう。** すなはちこれまた明快な意味における音聲的表出に外ならないといへよう。

* 鳥の聲については、その「うた」における「うたひ聲」と、同類に呼びかける「呼び聲」、危險な事態に當つての「叫び聲」などとを區別して考へる必要がある。一般には「鳴く」といはれるが、節まはしをもつて鳴く場合は、「さへづる」といはれる。「さへづる」は主として鳥聲について用ゐられてゐるが、古くは「ふしをつけて謠ふ」といふ意味でつかはれたところを見る

と、旋律的な點が共通なので同じ語が適用されたものと思はれる。一般にうたふ鳥は雄だといふことになつてゐて、雌のうたふのは例外とされる。

** 蛙の雄がその交尾期の後までも長く鳴きつづけるのは、それ自身、またその雌が鳴聲を聞きつけると否とに拘らず、内からの止むに止まれない衝動によると考へられる。鳥もそれと同樣の理由で囀るといふことは、もちろん屢〻あるが、鳥ぐらゐの心的發達の段階に及べば、多くの場合に聽いて聲の印象をうけとることが出來るのはほとんど疑のないところで、それ故に喜んで歌をうたふとも思はれる。馴れた鳥が飼主の示した何かの親切に答へて、季節はづれに「うた」をうたふといふ例も少くないといふ。(The Song of Birds [Ency. Brit., 11th ed., XXVI, 413])——さういふところに至れば單に性本能的ないとなみといふのから一歩出るわけだが、それにしても内面的な狀態の表出としての意味は、やはり認められよう。

鳥類などと同等に發達した發聲器官をもつ一層高等な動物について見ても、音聲機能は表出的たるに過ぎないといつていゝやうだ。猿における音聲機能はかなり發達してゐるが、それはいづれも情緒的表出の役目をするもので、それ以外に出ることはないといふ。* 類人猿チンパンジーにあつても、音聲的表白といへば何らの例外なしに、ことごとく「主觀的」狀態や「主觀的」欲求をあらはすやうなものだけで、つまり表情音聲に外ならず、それはまつたく確かに、對象的なものを指向し、それの表號となり符號となるといふ風なものではないといふ。** 物に名づけるといふはたらき(命名)は、こゝでも認められないのだ。チンパンジーになると種々の音聲を出すことが出來、およそ人間の言葉に用ゐられるところとあまり異ならない程度に種別に富んだ「音聲要素」をもつと考へられるが、これに言葉を敎へ込まう

として、いろいろやつてみた試みも、つひに成功を見るに至らなかつた事***なども思ひ合はせられて、人間以下の動物として最高位にあるこの動物にさへ言語が與へられてゐないし、その獲得の可能性もないといふのは、末梢的な理由にもとづくのではないと考へるのが當然だ。音聲以外の表出運動にしても、すなはちその顔面にあらはれるもの、身體運動(身振)にあらはれるもの、いづれも情緒的表出の性質を示すもので、かの演述機能を示すやうなものは一つも認められないのだつた。

* プンクストの報告。*Pfungst*: Ber. d. Kongr. f. exper. Psychol. 1902.

** ケーレルの觀察。*W. Köhler*: Zur Psychologie des Schimpansen. Psychol. Forsch. 1, 27(1922)

*** ヤーキス等の實驗。ヤーキス(*Yerkes*)はその著書で次のやうに述べてゐる。――「若いチンパンジーでは、音聲的反應は度々あらはれ、變化に富んでゐる。それは人間の音聲器官ほどもはたらけると思はれる音聲發生の器官を具へてゐるものゝ、音聲を摸倣しようとする傾向は、あるとしても僅かだ。チムとパンジー(若い二匹のチンパンジーの名)は、私の種々の動作をまねようとしたが、音聲をまねるのを聞いたことがないし、私のに答へて、それら自身に特有な音聲を出すことも稀にしかなかつた。……見られた物事は、摸倣され、または再生される傾を示す。聞かれたものは、再生されない。聽覺的刺戟を再生する――換言すれば音を摸倣する傾向を缺くやうな動物が物をいふことを當然として期待し得ないことは明かだ。人間の幼兒は顯著にこの傾向をあらはすのだ。「あうむ」もやつぱりさうだ。もし「あうむ」の摸倣傾向がチンパンジーの智能の品質と結びつくことが出來たなら、程なく話すことが出來たらう。……」(*Yerkes* and *Learned*: Chimpanzee Intellegince and Its Vocal Expressions, 1925. 53). 食物を要求するために若干の音聲を出すやうに馴らすことは、この實

驗で成功した。だが摸倣によつたのでなくて、食物を得るためにチンパンジーはこれをしたのだ。かくして得た母音・子音の種類はいろいろあるが、その發し得る音聲が生得的な情緒的表白に外ならないといふことは、ケーレルにおけると同樣にやはり確認されたところだ。(*Yerkes*: Almost Human; ——Great Apes 等參照)

音聲の機能におけるこの生物學的なモメント、すなはちそれの「表情音聲」としてのはたらきは、かうした比較心理學的考察において、その本來の面目を、よく呈露すると思はれる。この本來の表出的音聲は、動物の社會生活におけるそれ〴〵の事態にあたつて、時に警報の役割をいとなみ、時に告知の役目をつとめる。その發達の道程を進むに伴つて、次第に機能上の分化を見るに至るとはいへ、出發點はいつも內的狀態乃至過程の自然的な、自發的な顯現に溯らなければならない。*

* 「音聲言語と表情音聲」(前出)『心理學研究』五・一一八—九、および一二七。

人間における音聲の發現の最初は、新生兒の「うぶごゑ」だが、これは、一種の反射的な生理作用によつて生じると考へられるもので、格別、「いたみ」や「くるしみ」の表出、不快のあらはれと見るべきものではない。生後五週目乃至七週目に及ぶと、その發聲の上に變化が認められるし、そこに不快を推定させるやうなものが見出されて來る。それまでの新生兒の「なきごゑ」は、いはゞ純粹の反射的呼吸に外ならず、何ら心的狀態を反映するものではない、とされる。この種の叫び聲は生後第七週にも及ぶが、それから後になると、子どもは、不快・いたみ・くるしみを「なきごゑ」で表出するやうになり、しかも、その際の發聲に「かたい聲たて」を用ゐる。それからまた一方では、快感の表出として別種の音聲をつかひ、しかも不快の場合のとちがつて、「やはらかな聲たて」を以て發聲するといふ。* 表情音聲の種

別は、かうしてごく年若な子ども、乳兒においてはつきりした姿を示すわけだ。

＊　グツマンとフラータウの研究で明かにされたところ。*H. Gutzmann*: Physiologie der Stimme und Sprache. 2. Aufl. 1928, 72.

音聲のあらはれは、これから長い間、もつぱら表出運動の特殊の一方式として存立し、子どもの生活力の一弛一張や、その情緒・氣分の狀態の一起一伏がそこに具現される。それは他の表出運動とまつたく同列に位し、それらと相即相屬し、運動的行動全體の中にふかく織り込まれてゐる。

子どもにおけるこの初期の發聲は、かく表出運動の一方面として聽覺的印象に先だつて生じ、聽覺からある程度まで獨立して營まれる次第のもので、そのことは、生來的の聾者について見ても知られる。聾だといふことが暫く氣づかれずにゐるのは、その發聲的行動が正常の子どもの音聲的表出に比して、著しいちがひを示さないのによる。

生れたての「あかんぼ」の最初の音聲は、まだまつたく分化しない渾然たるもので、これを文字で書きあらはすことがむづかしい。普通にはオギャアといふことになつてゐるが、オアともオエともウエともエヘー、エアなどゝも書きしるされるやうな變化がある。生後數週の後には、叫び聲が分化して來て、乳をほしがる場合と痛みや濡れて不快を感じる場合となどが區別されるといふ。快適の感じに眼を輝かせ、わづかに唇の隅を上方に引いて「にこつき」、その後聲に出して笑ひはじめる時期は、まづ生後三箇月のうちに到來する。

進んで、いはゆる「かたこと」を發音するやうになれば、その以前のほとんど母音だけの發聲と事かはつて、數種の子音が次第にあらはれて來る。その出現の先後は、各音聲の調音運動における難易とかなりの關係を示すと考へられ

る。すなはち各個の兒童において、その發達の順序にすこぶる一致するところがあり、* それは民族の差異を超越して然る場合が多いところから、一般的な音聲發達の通則にかゝはる問題と認められる次第だ。

* すなはち母音はすでにおほむね出現してゐるので、子音についての發現の順序が問題となるが、アマなどのやうな鼻音〔m〕を含む音節が最初に來ることは、諸家の觀察の一致するところ。（ただし氣音〔h〕の出現は別問題とすべきもの。）――これと前後して〔b〕・〔p〕のやうな唇の破音、また〔g〕のやうな奥の破音もあらはれる。かうして「かたこと」らしい音節が構成される。それは當初單調に變化なく反復される。それから漸次強弱・高低の變化を示すやうに分化して來るし、また異なる子音を以て構成された音節を複合した形のものもあらはれ初める。かうして音聲的な成形を相當に示すに至つても、それは何ら本來の言語と本質上の交渉をもたないもので、言語機能の上からは無意味な發聲に過ぎない。

しかも、この「かたこと」において、心理學的に留意を要するもの、興味ふかいものが見出される。それはその發聲における抑揚に外ならない。特定の抑揚がおのづから表情的効果において一定したものを有し、種々の音聲を用ゐるにかゝはらず、抑揚と表情との間にすこぶる一義的な關係が見られることは、原理上興味ある事實だ。のちに說くやうに、發達した言語にあつても、具體的に話される場合には、それ〴〵の抑揚を示すのが常で、この種の抑揚は一般に「言葉調子」と名づけられてゐるが、それは本質上、この言語習得以前の無意味な音聲の荷ふ、それ〴〵の抑揚と異種のものではない。したがつて、本質的にいふときは、「言葉調子」の成語は、この事理にふさはしい用語ではない。その「表情音聲」において演じる表情的効果を十分顧慮するを要する。

音聲について抑揚とは、本來音聲の高さの變化、すなはち調子の起伏に關していふものに外ならない。表情音聲の

流動における大きな特色として、もちろんこの種の變化を擧げなければならないが、これに伴つて、あるいはある程度でこれと離れて、音聲の强さの變化もあらはれ、さらにまた時間的關係における變化も生じて來る。たゞ、これらの變化は、「かたこと」に關するかぎり、さまで著しい程度に及ばないので、音聲機能の發達の初期においては、これを十分に觀察することがむづかしい。

この時期における發聲機能の活用は、次第に圓滑を加へていくと共に、聽覺機能の漸次的發達も、こゝに影響を及ぼして來ることが、むしろ自然の勢で、「かたこと」の持續時間や出現回數や種別も次第に增加するが、そこには周圍におこる諸種の物音、殊には話しかけられる言葉の音聲からの感化も及んでゐるわけで、かうして生來的な聾兒は、次第に正常の子どもに對して音聲の抑揚の仕方の點でおくれを取るやうになる。* だが、この外的の能因がこの時期にはまだ〳〵あまり重きをなさないことは、成人をまねたのではないやうな、いろんな音聲を子どもが出すので見てもわかる。その中に出て來る音聲で、成人にとつてもまねて發音することが出來ないやうなもの、語音として用ゐられてはゐないやうなものがあつて、いはゞ手あたり次第、聲を出してみたといつた風だ。

* グツマンの觀察。シテルンによる。(Kinder sprache,4 157.)

音聲器官の分化發達は、一方語音の種別を豐富にして言語の習得に對して大いに貢獻すると共に、他方抑揚などを自由にしてこの表出的機能の發展に有利な事態をもたらす。子どもが話しかけられた言葉の音聲を模倣してみづから發音し、さらに進んで言葉の意味を了得してみづから話し出すといふやうに、前述の言語發達の幾段階を經て進むにつれて表情音聲はつひに話された言葉そのものゝ中に融會し、いはゆる言葉調子・語氣などとして一聯の語音形象・

語句に荷はれて發現するやうになる。

かうして「表情音聲」の種々相、その發展の諸段階は、音聲器官の整備、音聲機能の精度に平行して、系統發生および個體發生の各時期についてたどることが出來るが、そのもつとも高度に分化し發達した姿は、成熟した人間の話す具體的な言語のさながらの流動の中に見出されることになる。これによつて人間的情緒の微妙なニュアンスが極めて多彩に寫し出される所以は、人々がその日常經驗について省察するとき、容易に納得される。過程としての心理的・情緒的なものゝ様式・形相は、力的方面の種別および變化としてのピアーノ乃至フォルテ、クレッシェンド乃至ディミヌエンド、速度の方面の緩急の種別やアッチェレランド乃至リタルダンドの變化および高低の方面の變化たる言語旋律・言葉調子・イントネイションのやうな音聲流動の姿によつて、直接に端的に、そして如實に表出される。「表情音聲」こそ、他種の表情とともに、もつとも直截に心の動きやうをさながらに表白するものに外ならない。*

* 佐久間鼎「音聲言語と表情音聲」（心理學研究第五卷「第二輯」二八三―一三四）――「語調の心理的表出」（心理學論文集第二、九三――一〇〇）。なほ『日本音聲學』第十九章「音聲の心理的表出」（六四九―六七六）參照。

かやうに「表情音聲」すなはち表出的機能をいとなむ音聲活動は、普通には言語と結びついてあらはれるので、あるいはこれを言語の一側面と見て取扱ふのも實際上便利だと考へられる。しかし、これまで述べて來たやうに、原理上本來の言語と離れて存立し得ることを注意しなくてはならない。成人の場合にも言語以前的な表情音聲のなごりを示すものがある。それはいはゆる間投詞または感嘆詞に外ならない。これも今日普通には一品詞として取扱はれるが、言語の點からもつとも原始的な種類の間投詞は、本來それ自體意味を、語義をもつてゐないのだ。それは元來「表情

音聲」に外ならないので、これを他の品詞に比するとき、全く別種の特異のものだといふことがわかる。そこで、「あゝ」と書かれてゐるだけでは、ほとんど何物をも表出しない。具體的に發聲されるその調子、そのテンポ、その力により、そのいはゞ音樂的な姿づけによつてこそ、表情的効果をもつのだから、切言すれば、書かれた「あゝ」は、單なる母音の符號たる以外に、何物でもないといはなければならない。だからこそ、文法的または論理的に見れば、「間投」の語にすぎない。これをもとの姿に還元し、その豐富な色彩をとりもどして、はじめて「感動」詞たり「感嘆」詞たり、また「情意語」たることが出來るわけだ。

感動詞の示す音聲流動の姿は、おほむねやがて「文」における、またまとまつた語句におけるさうした姿に異ならないもので、いはゞその縮圖なのだ。その「表情音聲」の姿づけにあづかる音聲作用は、前に掲げたこゑの高さ・強さ・長さおよび聲たて(聲位)の種別や變化の外に、なほ話し方のテンポ、音聲休止の樣式などが考慮されるべきで、その幾多の態規によつて、具體的な音聲の進行の姿は、すこぶる多樣な有樣を呈する。もちろん多くの場合、他種の表出運動すなはち身振や顏つきを伴ふのは、事の當然に屬する。

かくして、音聲的表出は、内的リズム・内的テンポ乃至内的メロディーの外面への發露として、表出運動一般の音聲的方面を形成するものに外ならないので、それは民族・國民・教養等々の相異によつて各國語、各方言の間に設けられた障壁を突破して、たゞちに、人の肺腑に迫るといつた趣を呈する。顏面表情や身振動作と同樣に、たゞに超國境的で、また全人類的だといふにとゞまらず、人類を超えて他の動物にも効果を及ぼすところがある。具體的な音聲言語における音樂的要素たる「表情音聲」は、これらの點でかの「こゝろの言葉*」たる音樂と効果を同じくするものがあり、

その源頭に立至れば彼此相通じるものがある。

* 「内面的人間は言葉をもたない、彼は啞者だ。そして、どんなに人間が他の人間を愛してゐるかを傳へることができるのは、音樂だけなのだ。」――音詩人シューマンが、その友人に告げていつたこの言句は、深く味ふべきものを藏してゐる。しかも、この事は、やがてそのまゝ「表情音聲」にもあてはまることを、今や讀者は明らかに悟ると思ふ。音樂と同様に、「表情音聲」も、まさしくかの詩人ミュセのいふ「こゝろ（心臟）のことば」でなくてはならない。――「音聲言語と表情音聲」、一三〇―一三二。

表出的音聲の描き出す抑揚の姿について、若干の型を區別し、その特色を陳べることを筆者は國語の語句に即してかつて試みた。* なほ東京と京阪との双方における、この種の音聲的成形について比較を試み、共通な動き方の存立することを示した、** これを上述の考察に對する若干の實例とすることができる。

* 『日本音聲學』第十九章。なほ土井杉野「文と文意との關係」（九州帝國大學、學士論文）〔心理學論文集第三、三一九―三二二所載の摘要參照〕。

** 「語調の心理的表出」（心理學論文集、第二〔昭和四年〕、九三―一〇〇）

音聲的表出を分析的に追究するときは、きはめて煩雜な手法を以てして、しかもつひにその本質的なものを捉へるのに困難を感じる。しかも具體的體驗にあつては、直下に味讀される端的に屬し、三歳の兒童も、さらには動物でさへも、その把握「理解」を可能とする。眞に生活の實際に即してゐるとき、萬事はおほむねこれに類するものがある。

三　音聲的描寫

静寂を破つて突然ひゞく音響は、その突然さの故に耳にたつ。それはあたかも暗闇の中ぽつかり浮び上つた光の點が、そのきはだたしさを以て目につくのと同様なわけだ。印象に注意がひかれるなど丶、この事態について語るのが常になつてゐる。かうした印象は、いはゞ意識を占領するのだ。

印象とはいふが、外から來るものを、鏡が物の影をうつすやうに、何らの能作もなく、所動的にうけ入れるといふ風に考へると、實際の光景からよほど遠いものになる。いはゆる響の物に應じるやうに、鋭敏に反應するところにこそ、生物のもつとも生物的な存在たる所以が見られる。

生後四日目ぐらゐの新生兒について觀察される事實たる、光の刺戟に對する視線の「振りむけ」は、反射的に行はれる運動として見られ、シテルンは、これを本能的行動の一つに數へたが、*プライエルの觀察したところでは、生後八十一日目の乳兒に見られた音響の印象に對する、音源の方向への「振りむき」は、光の刺戟に對する同様な反應と趣を異にし、隨意的な動作としての眼界中における音源的な物の搜査の狀景を呈する。この場合には、鳴る物、音をたてる物の定位といふこと、方向の知覺といふことが、たとひごく大ざつぱな程度にしても、出來てゐなくてはならないわけだ。**さらに進んで、おとの來る方向に耳をむけて、よく聽きとらうとする態度を示すに至るのは、いづれの頃から始まるかは乳兒について確定することが困難だが、音響を注意して聽かうとする有樣が比較的早期にその容子にあらはれることは、容易に觀察される。***

* 「振りむき本能」Hinwendungs instinkt についてシテルンは記載してゐる。*W. Stern*: Psychologie der frühen Kindheit, 4 1927. 49.

** *K. Bühler*: Die geistige Entwicklung des Kindes.[3] 1922. 105.

*** ビユーレル（前出）一一〇。

生後二箇月目に及ぶと、**音響および音聲に對する反應**は、漸く分化した姿を示すに至り、聲の大小だけでなく、その性質をも辨じ、注意して聽く態度を示すだけでなく、快く受取る（にこ／＼する）などの容子を見せる。さらに一歩を進めて、耳にとめた音響・音聲をみづから發するところまで反應樣式を特殊化する。こゝに聽音と發音との最初の連絡が成り、音聲習得の道程における劃然たる時期がはじまる。一方「かたこと」獨白に際して生じた發音運動と聽覺印象との結合も、その効果をいはゆる自己摸倣において發揮し、發音し聽取するといふ順序だけでなく、聽取し發音するといふ順序で、同じ音聲系列を繰返し繰返し續けていく。子どもは、自ら發音するのが面白いだけでなく、反復知覺するのにも興味をおぼえて、ボールドウィンのいはゆる循環反應を以て音聲機能の發達を促していく。

つぎに自分でまだ發音したことのない、話しかけられた、または耳にとまつた**音聲系列の模倣**（自己模倣に對していはゆる「他人模倣」）が生じて、言語習得に大切な道を開く順序になるが、最初の模倣は人の音聲として發せられたものから始まるといふよりも、むしろそれ以前に種々の耳にとまつた音響に對して模倣的興味を以て發現するところに求めるべきこと、子供の心的發達の觀察的所見に徴すべきものがある。犬や家禽の鳴聲なども、かなりの逼眞性を以て模倣されるし、物音もそれ／＼特性的な音聲的表現を與へられることは、注意ぶかい觀察者の報告するところだ。子どもがはじめて耳にした物音をもさながらにまねるその巧妙さに、時折驚かされることがある。

發生的見地から考へて、この**音響模倣**にもつとも近い關係をもつのが、言語的資料の一種たる「**擬聲語**」・**オノマト**

ペアに外ならない。こゝに至れば、各種の音聲系列、たとへばワンワン・ニャーニャ・モーモー・コッコは、それぐの對象を指向する表號としての機能をもち、明かに個々の單語としての役目をするが、その音聲は各國語の音韻體系の埒内に局限されるものの、なほその語の表現する對象の音響的特性と相通じるものを保ち、その物に由來する聽覺的印象が音聲によつてかなり特色を保存して模寫される次第だ。（擬聲よりも擬音とすべきだらうが在來の習はしに從ふ）

成人の使用する語彙のうちにも、この種の擬聲語が相應に多く、特に音響をその特色について描出するために副詞的に用ゐるのが普通だが、わが國語にはヨーロッパの諸國語におけるよりも多いといはれ、しかもおほむね單語としてすこぶる原始的な形をあらはすものと見られる。數例をあげると、

（一）吹き鳴らされた音には〔p〕・〔b〕および〔h〕が用ゐられること次のとほり。

ポー、プー、ピー、ピュー、フー、ヒュー（一聲）

ポーポー、プープー、ピーピー、ピューピュー、フーフー（連續する場合）

ボーボー、ブーブー、ビービー、ビュービュー（前のに似た音色の不純な場合、噪音的または不協和的のもの）

（二）打ち鳴らされた音には、破音を以てはじめ、「ン」を以て終るものを常とする。（比較的單純なおとの場合）。

ポーン、ボーン、トーン、ドーン、コーン、ゴーン、カーン、ガーン

ピーン、ビーン、チーン、キーン

ポンポン、ボンボン、トントン、ドンドン、カンカン、ガンガン

キンキン、チンチン、チャンチャン

打ち鳴らされる對象によつて、それ〴〵ニュアンスがある。

ポコン、ポコポコ、ボコボコ

パタン、バタン、パタパタ、バタバタ

コトン、コトリ、ゴトン、ゴツン、コトコト

(三)物のきしみ、こすり合つて出た音には、破音と共に擦音も用ゐられる。風や水の音には擦音が用ゐられる。

キーキー、ギーギー、ギシギシ、ゴシゴシ

スースー、シューシュー、ジュージュー、ジャージャー、ザーザー

ザワザワ、カサカサ、ガサガサ

(四)物音のいりみだれたのをいふのには、異なる子音を重ね用ゐる。

ドカドカ、バチャバチャ、ガチャガチャ、ドタバタ、ガタピシャ

(五)とどろく音響には〔d〕・〔g〕のやうな有聲破音を用ゐ、また「ラ」行子音を配する。

ドシン、ドカン、ガタン

ゴーゴー、ゴロゴロ、ガラガラ、ガリガリ、ゴリゴリ

(六)子音の「清濁」、母音の「明暗」が描寫する音響の特性と密接に關係することについては、後に述べる。

成人の普通の語彙において擬聲語の占める數量を測れば、他の規約的な表號たる單語に比してきはめて僅少な比率を示すに過ぎないとはいへ、語音と語意との相卽の關係を示し、言語の發達心理學的觀點からその營む役割の相當に

重要なことを顧慮するとき、これに對する應分の留意が要求される次第だ。

子どもの言語においては、その數の乏しい語彙のうちに、この種のものが相當に多くの割合で使用され、むしろ好んで口にされる趣がある。シテルンが自分の幼女の言語發達の初期(第一言語期)における語彙の統計で示すところによると、滿一年半では、オノマトペアがまさしく全語彙の五〇%に及んだといふ。そこで、氏は、何故に子どもがこの種の單語を好んで用ゐるか、またこの種の語が何から由來するか、聽取した自然の音を模した音聲を自ら見出すのか、それともすでに成人によつて出來上つてゐるものを取り入れるのかを考察した。*

* *C. u. W. Stern*: Kindersprache,[4] 1928. 376—384.

音聲言語が、何か「他のもの」の表號として用ゐられるといふ根本的事實は、その表號を、「他のもの」の特色のうちから直接に取出して來た場合に、もつともはつきり看取される。ある音響の印象に對して、それを模倣しようとする本來の傾向が、その反應をやがて音をたてる對象なり過程なりの瞬間的な「しるしづけ」以上のものに高めるその刹那から、たゞの遊戲でなくて、オノマトペア的語構成を遂げるわけだ。だから、オノマトペアは、描畫的身振のもつ自然性を具へてゐる。それが規約的語彙に對する關係は、繪樣文字・象形文字の音標文字に對する關係に應じるわけだ。(シテルン)

そこで、兒童語のうちの擬聲語の部分は、子ども自身が作り出すものだといふ風に豫想するのは、自然な考へ方といへよう。ところで、事實上からすると、子どもの創作にかゝるものが稀だといふことは、觀察の所見に徵すべきものがある。この極めて少數のものを除いた爾餘の語彙は、子ども自身が直接に物の音をまねてつかひ出したのではな

くて、他から既成語として子どもに話しかけられたのを取入れたといふわけだ。見かけ上子どもの創作と思はれるやうな語が、實はかういふ經路を通つて覺えこまれてゐるといふ多くの例を、周到な用意による觀察が示すのだ。で、この點をよほど愼重に吟味しなければ、誤謬をおかすおそれが多分にある。

事實は成人が子どもに話しかける場合に、小兒語と相場のきまつてゐるワンワン・ニャーニャー・ブーブーなどを以てするのが通例で、それが子ども自身の擬聲語發明の能力の備はる以前にすでに行はれるといふ次第なので、これを發現させるに至らないわけだ。

音響の聽覺印象を音聲を以て描寫するオノマトペアは、本來擬聲語だが、これと近似したものに「擬態語」がある。これは本來の擬聲語以上に數多くわが國語に行はれてゐるもので、やはり副詞の位置をとつてあらはれるのが通例でもあり、本來的でもある。ブラ〳〵・キョロ〳〵・スルリ・キチンなどの例をあげれば、他は推測されよう。ヴントが「音像」Lautbild と名づけて、音聲模倣と區別して取扱つたものが、* ほゞこれに該當し、氏もその言語發生に對する重要義を認めて考慮を拂つてゐるが、その徹底的・本質的解明は從來の要素心理學の建前においては困難、むしろ不可能といふべきだ。氏がオノマトペアもつまり「音像」構成の一般原理から理解されるべきだとしたのには尤もなところがあると認められるが、これを共に音聲器官の發音發聲における運動に歸着させようとし、「音身振」Lautgebärde を持ち出して來て說明しようとするやうな仕方では、事理に徹することを期待しがたい。

* *W. Wundt*: Völkerpsychologie, I. Die Sprache 1,^{3} 1911. 338—348.

更新された心理學の立場から、一般に感性經驗の各方面における照應的な、相通的な、そしてまた一層原層的な面目を見出すに至つた近時の考察は、この問題――音聲と意味、語音の「相好的特性」を解明する鍵を與へるものだ。そしてこれが心理學自體にとつて貴重な認識たると共に、言語の論究に對してもきはめて重要な事項たるべきことは、想見するに難くない。

すなはち、舊來の心理學は、直接經驗における客觀的なもの、現象的世界の所與に對して、一定の類別を以て區分をすることを努め、これらの類別の相互間には嚴重な差別・區劃をおいた。さうした區劃の一種で、ヘルムホルツが特に重要視したのは、各種の感性方面における直接所與・直觀的資料の間におけるものだ。たとへば、いはゆる色彩感覺における色相の系列の間には、相隣り相比較し得る性質上の連絡があつて、その差異は色彩のクワリテートの間題だが、それといはゆる音響感覺における屬性とは、相互に比較し得ない、まつたく類のちがつたモダリテートの異なりがあると考へられた。この本來的に相異なる感性モダリテートの間には、何ら直接の聯絡がない。具體的經驗においてそこにいはゆる「色聽」audition colorée のやうな、「共感覺」のやうな現象があることを認めなければならないとすれば、その二つの相異なる感覺領域自身において交渉が存立するのでなくて、そこに附帶して來る別箇の心的要素たる感情の調子に同種のものがあるのによると說明される。ヴントの所論の建前の如きはそれで、前述の「音身振」についても、この種の考へ方が根柢になつてゐる。ところが、近時の心理學は、それらの考へ方の根本的豫想だつた、各個の感性モダリテート間における嚴重な差別觀を改訂して、いろ〳〵の點で相互に相通じ相似るところのあることを明示するに至つた。感じの「あかるさ」すなはち明暗の識別や、「あらさ」すなはち「精疎」の差異や、「するど

さ」すなはち鋭鈍の趣や、運動性や、一般にいはゆる「**モダール間現象**」乃至「**超モダール性質**」の認識において、心理學の所得はすこぶる豐富になつた次第だ。*

* 後に「音聲の現象」について、「あかるさ」などの事理を見よう。なほ前出『ゲシタルト心理學』二二四以下、および *Köhler*: Psychologische Probleme, 1933. 152—155. 參照。特にホルンボステル（*v. Hornbostel*）の「感性の一樣性」についての諸考察、ヴェルネル（*H. Werner*）の「體感と體感作用」に關する諸研究にこの方面の知見をうかがふことが出來る。またカッツ（*D. Katz*）以來興味ある問題となつた振動觸感性の事實、それの聽感性に對する交渉の知見も、こゝに顧慮すべきものが多々ある。佐久間鼎『ゲシタルトの問題と學說』第二輯『運動の知覺』（昭和八年刊）一五五以下には、感性經驗と運動性の問題に少し說き及んでゐる。第三輯（未刊）でも體感と知覺との關係について論及する。

單に音響のだけでなくて、さらに狀況の描寫をも企てる場合に、音樂における標題樂（Programm-Musik）のいはゆる「音畫」（Tonmalerei）の存立の可能性は、この感性心理學的根據にもとづく。音樂的表現の手段として、そのリズム性（フーゴー＝リーマンのいはゆる力律性 Dynamik および時律性 Agogik の總體としての）は、よく現象的所與における**運動性**を荷ふに足りる。さらに旋律性乃至和聲性（Melodik und Harmonik）は、現象的光景における**變化性・發展性**を描き出すにふさはしい。また近代の交響樂において發達した器樂法の驅使は、音畫における色相性に多彩な變容を賦與する。かうした表現手段を適切に用ゐて、情景の描破を試みるのは、單純に考へられた自然の形骸の模寫ではなくて、また畢竟、人間心理の內奧において契合するところを見出さうとする眞個の藝術的意圖に外ならない。

言語における音聲的描寫の可能性は、また實にこゝに存する。したがつて、たゞ音響の模倣だけに限られないで、さらに自然と人事とにおける事象・動作の運動性の描出にその機能を發揮し、なほ進んで、對象のありざま、事物のたたずまひをも、その感じにおいて表現する。これを特に、かの擬態語について、はつきり看取することが出來るだらう。わが國語における數多くの擬態語は、現在でもそのすこぶる原始的な狀態において語態的變容を蒙らずに存在してゐるものと思はれる。したがつて、この邊の事由の考察にとつてはまことに好材料とすることが出來る。

動物の運動、ことに歩きぶりには、それぞれの種屬の特色があり、運動經過に一定の全體的特徵を示す。また「まふ」といひ、「をどる」といひ、「飛ぶ」といひ、「はねる」といふにも、それ〴〵の行動的全體における體制化された姿・かたちが備はる。「運動旋律」Bewegungsmelodie の名稱ある所以だ。かうした運動的體制は、人間的行動について最も人々の關心事となるが、動物における行動樣式も興味を惹くものがあり、さらに自然界の事象におけるものも、多くの話題を提供する。かういふ運動旋律・樣式の描寫は、音聲的手段によつてすこぶる精細に遂げられ、そこにさながらの光景を髣髴させ、そのまゝの「感じを出す」といはれるやうな逼眞性が認められる。

動作または進行の有樣について、その凝滯なく、なめらかに營まれるのをいふ音聲的描寫には、同じ**滑動の感じ**を伴ふ各種の擦音また「閉擦音」（半閉鎖音）が用ゐられること、容易に觀察されるところに屬する。特にスー・ツー・ズーのやうな音節が代表的で、スースーは擬聲語的だが、「スーッと」などに滯りなく進む有樣がさながら示される。スルスル（スルリ）・スラスラ（スラリ）・スタスタ（スタコラ）・ズンズン・スクスク・スパスパ・ズバズバ・ツルツルなどに滑かに支障なく流れるやうに進行し、動作する趣があらはれる。スンナリはスラリと似かよひ、スベスベはツル

ツルと同義に用ゐられる。スッキリ・スッポリは態度・容子について何ほどか趣を同じうするものを表現してゐるし、進行の急調なのにセッセ・セカセカ・ソソクサ・ツカツカなどいふのも、相通じるところがある。もちろんこの場合に語義の色づけに母音性の「もちあぢ」が参與して、さま〴〵のニュアンスを示すわけだが、その事情については別に說くことにしよう。

運動性の描寫において、他の著しい音聲的材料となるものは、ラ行子音で、その特色は**ふるへ動く**狀況の表現にある。元來この子音は、二つの母音の間に挾まれて、母音性の瞬間的減弱を結果するもので、擬聲語的にはやゝ不連續的、變動的進行の特色を示す音響の姿を描きだす。擬態語的にも、また同樣な運動の光景を表現するわけで、その際伴ふところの母音の音色の明暗・銳鈍によつて、動き方の模樣のニュアンスを傳へることが出來る。すなはち、緩やかな動き方を示すときには、ノロノロ・ソロソロ・ユルユル・ユラユラのやうに、またもつと特定の運動樣式をあらはすが、とにかく緩やかな變動・轉進についてウロウロ・オロオロ（オドオド・オヅオヅ・ウヅウヅ・ウヨウヨなども、相似た効果を生じる）・ヨロヨロ・コロコロ・ゴロゴロ・ゾロゾロ・ノラクラ・ブラブラ・グラグラのやうな語が用ゐられ、いづれも「暗い」母音を伴つて來る。クルクル・ブルブル・グルグルなど、普通に廻轉や震動の有樣を示すが、さらに「あかるい」母音を伴ふ場合には、その動き方は、速くて、かつ小刻みになること、クリクリ・キリキリ・ビリビリ・ピリピリなどにおけるとほりだ。かうした運動の特色たる顫動は、これらの語彙の發音に際して、振動觸感性を介して體驗されるわけで、具體的な心境にあつては、聽覺的印象と融會して渾然たる景觀を呈する次第と思はれる。

以上のやうに疊語的構成をもつ擬態語は、大體において連續的な（場合によつては斷續的な）動作や事象の特色を表

現するに用ゐられるが、さういふのと異つて、運動の突然な、だしぬけなこと、急に生じる變化の趣などをあらはすためには、また別の仕方があり、それ〴〵の擬音乃至擬態的色彩を帶びて、「パッと、ヒョッと、ニュッと、サッと」などのやうに用ゐられる。かうした語構成は、音聲の側の「促音」的効果が、運動性における突然の出現や變化の感じと共通なものをもつのによる。

なほ疊語的語構成によつて**リズム的運動樣式**が描き出され、特に破音によつて輪郭をはつきりさせて、一層その効果をもたらすやうな語例を見ることが出來る。テクテク・チョコチョコ・ピクピク・ピョコピョコ・チクチクなどにそれがあらはれてゐる。特に躍動・躍進の趣を描き出すのに、ピンピン・ピョンピョン・ズンズン・ドンドン・グングンなどのやうな語があるのは、現象的な特性としての「はねる音」たる「ン」の感じによるものと思はれる。

以上の所説は、擬態語による運動性の音聲的描寫について顯著なものゝあることを示した次第だが、前にも述べたやうに、それは運動性に限られるわけではない。事々物々の具現する直觀的な特性、在りざまの感じられるまゝを表現するのに、擬態語が比類のない直接性を以てすることを看取するのは、さほど困難なことではない。そして、その心理的にもとづくところは、各種感性經驗における照應的特性の存する事實に外ならず、すなはち超モダール的共通性によつて然る所以を認識すべきだ。

たとへば視覺的印象の光りかゞやく光景について、キラキラ・ギラギラ・ピカピカ・テカテカ・テラテラなど、またチラチラ・ヒラヒラなどの表現があつて、元來光度の變化の直觀的描寫と見られ、運動性に近いものが感じられるが、さういふのと趣を異にし、單にありざまについていはれる語彙にも、おのづからその感觸のあらはれてゐるものが見出

される。シッカリ・ガッシリ・ピッタリ・スッキリ・サッパリ・グッタリ・ムッツリ・ユッタリ・ニョッキリ・ヘナヘナ・ゴタゴタなど、その例とすることが出來よう。

この直接の感觸は、概念的な言語の仲介を以てしては、適切に表現しがたいものがあり、音聲的特性のどの邊にその感じが求められるかを分析定立することも、困難な仕事に屬する。これは、いはゆる漂渺として捉へがたいといふ風の體驗の狀況なのだ。しかも、こゝに何等か照應の事實の伏在することは、きはめて漠然としてではあるがすでに古くから人の氣づいてゐたところであり、*殊に國語の語源について幾多の臆說を生み出しもした。その間甚だしい荒唐な所說もあまた提出されたので、確實な知見を以て進まうとする學者の側からは、しば〳〵一般的不信用を以てむかへられるといふ形勢をも馴致した。しかし直觀的事象・對象的特色の音聲的描寫の根柢に心理的な因由の存することは、つひに近時の感性心理學上の知見の指示するところとなり、その間の消息は、實驗的手法を以て搜り求められるに至つた。それらの事項については、次に述べよう。

* 語源についてのいはゆる「音義說」のうちにも、若干のすくひとるべき見解があることを公平な人たちは認めるだらう。

四　音聲の相好

「おと」としての相似からの擬聲語の發生は、音聲と意味との相卽のもつとも手近かな例だが、さらに運動性における相卽による音聲的描寫に比すべき事實として、なほ對象の示す現象的特性と音聲の直觀的感觸との間に照應の存在すべきことも、いはゞ直覺的に了得されるといふ趣があつて、さういふ見解が漠然とした形で述べられたことは、往

往見出されるところに屬する。* しかし、この間の消息を適確に示すことは困難で、したがつて科學的知見として認められることが妨げられて來た。のみならず、在來の心理學における根本的豫想が前述のやうに融通のきかない感性のモダール的區分を固執して、觀察的事實のすなほな受容を拒む傾を示した。

* 「言語ハ音聲也。言聲ニ形アリ、姿アリ、コヽロアリ。サレバ言語ニハ音聲ヲ以テ物事ヲ象リウツス事多シ。……今其大概ヲ顯ハサントシテ、ソノ類ヒヲ四ツニ分ツ、一ツニハ鳥ケモノヽ聲ヲウツス、二ツニハ人ノ聲ヲウツス、三ツニハ萬物ノ聲ヲウツス、四ツニハ萬ヅノ形有樣意シワザヲ寫ス、是也」（鈴木朖『雅言音聲考』文化十三年刊）のやうに古くすでにこの種の見解のあらはれを見る。

もし、一旦その種の豫想を清算して、現象的事實に卽して出發を新にするとき、こゝに新景觀が次第に展開されるに至らう。行きつまつた研究・考察は、こゝに及んで、新生面を拓くべき機會をつかむことが出來る。感性經驗の心理學は、むしろ他の分野に先んじて、心理學における更新の歩みを進めたのだつた。そして、まさしくこゝに問題とするこの種の事項についても、すでに新しい道は開かれた次第だ。

原始的心性の比較研究は、まづ感性と行動との未分化的渾融を心的發達の初程において考へるべきことを敎へた。成長した文化人における自然認識では、環境の物がそれ自體存立し、單に對象としての性質をもつに過ぎないが、原始的心性における態度は、最初からそれと異なつてゐる。物は自分が働きかけるべき欲求の對象か、自分に影響を及ぼすべき力の權化かの、いづれにしても自分に關係づけられてゐる、かかりあひをもつものであるか、さもなければ何でもない、興味のない、問題にならないものなのだ。そのどちらの場合にしても、自分と對立した客觀的な物の世

界をそれとして考へて、主觀をそれから區別するやうなことはなく、はたらく自分を中心としての欲求的・情緒的世界の部分として、食ふべく、つかむべく、たたくべき目標として存在するのだ。

この原始的心境にあつては、問題にされる外物の存在が、自己と遊離してではなく何らか自分にかゝりあつてゐる。對象性が純粹にあらはれることなしに、著しく狀態性と融合し、知覺が情緒的につよく色づけられる。外來の刺戟作用の効果として生じる心的所得は、かの對象意識的知覺といふよりは、しば〳〵狀態意識的特色を帶びる。それ〳〵の程度においてこれはかの「體感」vitale Empfindung といふべき心境に近づいてゐる。かうした原始的心性に對する事々物々は、物に卽し事に卽して把握されるのでなくて、「われ」に係りあふとして受取られる。いひかへれば、物がそれ〳〵の「顏付」をもち、「相好」を備へてあらはれる。それは好意をよせる顏付をもつこともあり、つれなく、おそろしい相好を見せることもある。自然民族においてこの心境がうかゞはれるわけだが、子どもの心的生活にもまた實にこの原相的狀況が呈露される。*

* *H. Werner*: Einführung in die Entwicklungspsychologie, 1926. 45—, Grundfragen der Sprachphysiognomik, 1932.

ところでこの種の心境は、たゞに自然民族や兒童期において見られるだけでなくて、この現實の生活圈內 „Lebensraum" において素朴に動き廻る人々にもまた普通にあらはれる種類のものだ。概念的認識のいかめしい檢討の態度で臨まない限り、周圍の事々物々は、「つめたく固い」法律的物件や、何らの「感じ」も伴はないやうな物理的存在として受取られるのではない。好もしいと感じ、または厭はしいと思はれるもの、ほゝゑみかけると見える、あるいは疎ましいといふ氣がするものなど、われらの日常生活は、さうした事物にみち〳〵てゐる。なごやかな春の海、威壓す

る岩山の姿、自然の景觀も、時により折にふれて、さまざまの顏付を示す。さういふ自然界の面容のうちに、綿々たる美を求めていく趣味の生活では、いふまでもないが、日常卑近の生活圈内における現象するまゝの事々物々は、もとからした顏付を以てわれらと交涉する次第だ。

この「相好的なもの」の特殊徵候は、ヴェルネルに倣つて簡約して數へたてると、(一)動靜、內的擧措、緊張と運動などの力的特色。これはすでに運動性として述べたところのものに外ならない。(二)個別的感性の殊別を超えた超モダール的特性。「あかるさ」と「くらさ」、「するどさ」と「にぶさ」など。(三)表出理會を可能にするその相好の含意性。相好は相屬する具體的事態・文脈の一部分で、それの理會はその相屬する全體に卽し、相入する全事に坐してはじめて可能なのだから、それだけでは異なりのない同一の表出も、事態の全容の異なるにつれて理會される內容を異にする。

以上は、生活圈內における日常的經驗にあらはれる事々物々の一切についていふことの出來る事がらなのだが、特に言語について、また音聲について、その豐滿な具體性においてこれを感受するとき、またそれの著しい特色として見られるところに屬する。たゞその程度において、論理的・槪念的操作を蒙るによつて言語の抽象化の發達を見るに至つた文化社會のものと、かの原始的心性において營まれる言語生活、すなはち先論理的・情緒的を特徵とする自然民族乃至兒童におけるもの＊との間に、顯著な相違のあることは、注意しなくてはならない點だ。

＊ その原始的な點で、自然人と兒童とは種々の共通性を示し、しばしば一樣に取扱はれるが、自然民族に多く見られるやうな宗教的・呪術的考へ方は、文化社會に生育する兒童において、自發的には發生せず、むしろ傳說・口碑の形で移植されるに過ぎず、想像的遊戲の中核をなすものではない。子どもは、今までに經驗して普通の事象と考へるところに立脚して、

新しい事象をできるだけ自然的に理解しようとする。*I. Huang*: Children's Explanation of Strange Phenomena. Psychol Forsch. 14, 63—182.

言語における語音と語義との間に本來内面的にこれを結合させる所以のものがあり、言語の發生の最初は、さうした音義相卽の事由から理解すべきものだといふ考は、ずつと昔から行はれたところのもので、プラトーンがすでに〔r〕を以て運動の種々相をとらへ、それを表白するに堪へるものとし、當時のギリシア語の例をあげて、然る所以を示したといふ。この際鳴りひゞく語は物の模寫ではなくて、物の本質の言語感による形だとして考へられたわけだつた。神祕家ベーメやロマン的空想家の言説だけでなく、ライプニツ・ヴィルヘルム＝フォン＝フンボルト・ヤーコプ＝グリムなどの思索家・研究家も、音聲と意味との内面的相卽の存立を考へたのだつた。*

* フンボルトによれば、有意味たらうとする語音の意向と有能性、語音と語義との間の關係の存立、すなはち語音の含意性は、たしかな事がらだ。かうした關係について、次の三種が擧げられる。すなはち、(一)オノマトペア的、(二)象徵的、(三)類比的。發達した言語では、その中の二と三とがはたらいてゐる。なほ *E. Cassirer*: Philosophie der symbolischen Formen. I. 參照) ——同一の音聲系列が同じ意味を帶びて幾回となく發音され、また異なる人々に用ゐられるなら、その合致する所以は一樣の原因にもとづくと考へなければならないが、その據點は偶然の事情といふのでなしに、語音と語義との本性に存する次第だと、ヘルマン＝パウルも述べてゐる。その語音と語義との内面的關係は、それを媒介するものがない場合には、語音が聽者に與へる感性的印象により、またその語音の發生に必要な、話者の側の運動神經の活動の供する滿足によるとする外はないとする。(*H. Paul*: Prinzipien der Sprachgeschichte [5] 1920. 177)

近ごろでは、幾多の卓越した言語學者の間に、「語音象徵」の言語發生に對する重要義が認められるに至つた。シュ

トヒャルト(Schuchardt)にあつては、オノマトペアがもつぱら考察されたが、「語音の内面的な姿」についての注意すべき見解が見え、イェスペルセンもまたこの問題に論及してゐるところがある。* アメリカの言語學者セイピアの如きは、この問題の檢討のために、若干の心理學的實驗を試みた。**

* *Jespersen*: Language, 市河・神保譯「言語」。

** *E. Sapir*: A study in phonetic symbolism, J. Exper. Psychol., 12, 225—239 (1929).

現時の心理學は、音聲の含意性について、語音象徴の事實について、實驗上具體的證左を與へることを以て、一つの興味ある課題とすると共に、それの原理的考察において舊來の見解を一掃し去つて、廣い展望の下にこれを見直さうとする。その考察において注目すべき新見地を提供したものは、フォン＝ホルンボステルの論究だ。* 次に氏のいふところを聞かう。

* *E. M. v. Hornbostel*: Laut und Sinn, Festschrift Meinhof, 1927. 329—348. なほケーレル「ゲシタルト心理學」(譯本)第七章「行動」參照。

音聲器官の運動を伴ふ音聲發生は、音響學的にはまさにこの運動によつて規定される。だが、この運動自體は、全體運動の一部に過ぎない。音聲身振は全體身振の一部で、人爲的にそれから分離し得るだけだ。言語に身振が伴隨するといふ風に説くのは誤解を招くので、むしろ身振に音聲が從ふといふべきだ。なぜといふに(前にも述べたやうに)物いはぬ動物も身振を——表出運動をするから。ところで、身振は身振で、心理物理的全體過程の一側面に過ぎない。その全體過程が知覺と、知覺を伴ひまたは知覺でひき起された感情と、知覺および感情によつて解發された運動とに

分れるとするのは、間違のもとだ。生活體はまさしく一個の生活體で、それの全體機能を部分機能に分割するといふのが、假作に外ならないとは、格別新しい發見でもない、當然のことなのだ。

で、感性的知覺・感情・運動が單一・不可分の一事象の各別の側面に過ぎず、心理物理的全體過程を觀測するに當つて取り得る各異なる觀點に過ぎないことを、いつも念頭におかなくてはならない。ところで、心理物理的全體過程は、その都度都度、一には內面的事態、すなはち個人の住するその狀態に、二には外面的事態、すなはち個人がまさに當面してゐる、そして個人をそれの一部とする環境によつて規定される。この內外兩面の事態に制約されて、心理物理的過程の「むき」が、含意が、その都度都度きまつて來、かくて同時に知覺されたものと感情的內容との意味、また運動や身振や音聲の意味がきまる。すなはち意味(含意)こそ音聲を規定するのだ。

この考察にとつて、「內外事態」の概念の限定は必要でない。內的といふのを心的なものに限定しようが、または「皮膚に蔽はれた領域內」に生起するところのものを一切含めようが、關知するところでない、要は、內面的事態がたゞ一個人の事で、外面的事態には多數人が同時に參與し得るといふのにある。心理物理的全體過程は、外面的事態だけに依存することが出來ない、かへつてその影響は事情によつて極小に局限されることもある。すなはち、心理物理的全體過程の規定は、かならず個人的だが、かならずしも「人際」的・心間的だとは限らない。簡單にいへば、自分の知覺し、感動するところ、またふるまふ身振の如何は、同一事情の下に他人が知覺し、感動し、またふるまふところと、同樣だとは限らない。そして私の知覺、私の感情、私の身振(表出)が、私以外のものに合致するかどうか、そしてどれだけ合致するかは、最初からきめてかゝれるものではない。畢竟するに、身振、すなはち心理物理的過程のうち他

人が知覺し得るところの唯一のものたる表出が、感情に對し、さらには、それが「表現」する知覺に對してたもつ關係を、單に信號機の運動が、他に對し發信者の傳へようとする信號報告に對する關係などと同樣だとする見解を主張するのは、極端に走つてゐる嫌がしば／＼ある。この見解は、身振を目して、事態によつてその意味を規定される單一事象のさうした一面に外ならないとする見地に同意しつゝも、なほ固執することが不可能でない。といふのは、同一の意味が知覺では別樣にあらはれ、身振ではさらに別樣にあらはれるとも考へられるからで、あたかも振動のエネルギーが振幅にあらはれては「おとの大いさ」に關聯し、振動週期にあらはれては「おとの高さ」に關聯すると同樣なものがあるとする。だが、何か突然な、短い、急なものの知覺が、靜かな、眠さうな、のびやかな、物やはらかな身振と一緒になるなどゝは、すこぶるありさうもないといふことを、長々と哲學的論議を重ねるまでもなく考へられよう。……私たちはむしろ反對の見解を以てやつてみたい。意味は知覺にあらはれるのと、まさしく同樣に、身振にもあらはれる。自分に感じられる、そのまゝに自分はふるまふのだといふやうに考へて行かう。本源的で自然的な者にとつては、**「ことば」は鳴りひびく意味だ**といふことがあてはまる。

この想定に從ふと、他人の心的生活をその身振――姿勢・顏つき・手つき足つき・音聲――からよみとることがどうして可能かの問題は、よほど簡單に答へられる。他人の身振について直接端的にその人の感情を、またその人の知覺を認知するのに外ならない。もちろん他人の心理物理的全體過程は、その人の內的事態がそれの規定に參與するし、私の知覺は私の內面的事態がそれを規定するにあづかる。他人の知覺するところは、「その人の流儀で色づけられるし、この個人的な賦彩のうちに他人の所得がはじめて私に知覺される。私は私で自分の眼鏡で一切を見るのだから、その

所見は自分の着色があり、當初の意味はかうしてつひに不分明になり不可解にかはつてしまふことさへある。だが、こゝに考へるべきことは、第一に、人が單純素朴で原始的であればあるほど、その體制とその履歴とに個人的差異が少いこと、第二に、人が原始的なら原始的なほど、空間的および時間的にその生活する範圍が狹いといふことで、かうして各個人がそんなに互に異ならない(內面的事態が相似てゐる)といふわけで、最初は知覺されたものを色づける個人的色相があまり相異しないし、また最初は、今此處にといふ狹い現在がほとんどもつぱら身振を規定する(外面的事態がすべての來參者に共通だ)。といふわけで、極言すれば、すべての人が同一事を共通に體驗するわけだ。したがつて、音聲身振は、もともと共通な體驗の一側面に過ぎず、それの意味はつまり共通事態の意味に外ならない。この境地では、音聲が語義の「荷ひ手」でもなく、意味が音聲に「うつし載せ」られるのでもなくて、意味が音聲のうちに聽覺的現象としてあらはれる次第だ。

したがつて、本來その源頭にあつては、**音聲がまつたく意味に適合してゐる。**聞えたところを會得するのに、何の豫備も、何の學習もいらない。意味は直接に見られ、感じられ、かつふるまはれると同樣に、仲介なしに聞かれるからだ。言語の發達の初程にあつては、事はまさしくさういふ次第のものだつた。(ヴェルネルが顏つき・相好の直接端的の把捉といふのも、これを別の觀點から述べたものに外ならない。)言語發達の後の時期に對しては、推論をうらがへしにして行くことになる。直接に、かつ一般的に(超個人的に)分るやうなものが、元本的なものだと。

現在の文化民族の言語のうちに、かうした本來的の言語創作の事例を見ることが極めて稀なのは、すでに子どもの言語發達の場合についても見たところで、現在行はれてゐる語彙についてかういふ意義相即の實例を見出さうとする

幾多の努力は、無益に拂はれる觀をしばしば呈する。しかし、さらに立入つて考察するときは、音聲における心理物理的全體過程の流露の事例を種々の具體的な言語的收藏の中から見出すことができるのであつて、そのわが國語における運動性の具現の諸例は、すでにその一斑を示した次第だ。緩急・遲速等の特色が音聲系列のうちに實感味をもつてあらはれることは、かく具體的に示されると共に、その心理學的說明の根據も以上の見地から與へられる。(ホルンボステルの揭げた幾多の興味ある實例も、よくこの事を示す。)

さらに進んで、かの言語の最初の發生におけるやうな事態を、今日特殊の用意の下に招致することが出來、その場合に處して言語がどんな方向に發生の途をたどるかを見ることが出來たならば、言語の太初における創始の問題は解明の光を與へられるはずだ。この心理學的設問の實施において、種々の困難があるが、與へられた對象に向つて新にそれに適應した名稱を見出すといふ課題を以て、巧妙な手法の下にこれが解決を試みたのは、ウスナツェの研究*だ。

* *D. Usnadze*: Ein experimenteller Beitrag zum Problem der psychologischen Grundlagen der Namengebung. Psychol. Forsch. 5, 24—43 (1924).

無意味と思はれる圖形で、なるべく既知の對象と何の聯絡もないやうなものを用意しておき、これを觀察者(被驗者)の前に短時間露出し、それに適合する名稱を見出させるやうにする。たゞし、名稱を創作するのでなく、あらかじめ一定の原理によつて結成された音聲複合で、まだ單語として知られてゐないやうなものを表にして列擧し、そのうちからそれ〲の圖形にふさはしいものを選びとらせるやうにする。それから觀察者がその實驗の經過中に體驗したところを述べさせる。——かうした手續で得た資料を通覽して、命名作用の心理學的根柢として氏が述べてゐると

ころによると、次のやうな事が認められる。——

命名すべき對象と音聲複合との間に作り出される結合に際しては、ごく一定した心的狀態があらはれ、それが命名機能の根柢と呼ばれるべきものになる。すなはち、一般に任意の對象に偶然に結びついて、それからそれの名稱として役目をするといふのでなく、こゝに一定の法則的能因がはたらくと考へられる。それは、(イ)與へられた音聲複合の音成分が既知の言語中の一單語の音成分と同化し、その單語が命名すべき對象の統覺された意義の表現として用ゐられるといふ同化(聯合的能因)、(ロ)音聲複合と對象との把捉された個性的姿態の合致の體驗(姿態近似の能因)、(ハ)それの情緒的合致(情緒的能因)、および(ニ)兩者の知覺に伴ひ、被驗者が名づけて一般的印象といふ特殊の狀態の體驗。この狀態は記述を以て捉へることが困難、もしくは不可能でさへあるところから、「深層の能因」と名づけておかうと氏はいふ。後の三種をひつくるめて卽事的能因と呼んでゐる。

實驗成績の商量から、この卽事的諸能因の言語定礎の價値を、聯合的のよりもずつと高く認める。さうすると、同一人において、また同一物において音聲複合が恒常に對應し、この對應については、各觀察者の間にかなりの合致があるべきことが豫想される。

この點を計量的に決定するまでに資料が豐富ではないが、その合致の率が豫想以上に大きいことは、興味あることといはなければならない。卽事的諸能因が、言語的對象をもとづけるものであり、すなはち語詞全體、音義融會相卽の根基となるものであらうと推定される。音と義との兩者の間に、配偶者としておのづから相適し相和すべきものがあり、もと〳〵たゞ偶然に盲目的に結び合せられて語があらはれる次第のものではないことが察しられる。*

＊　ケーレルの引例参照。（「ゲシタルト心理學」二二五および第一八、一九圖）

宮崎は、それぐ\一種の感性經驗をまつたく缺いてゐる聾者および先天盲について、この種の命名の機能を檢したが、その際比較のために、まづ正常人に、なるべく既成の言語に交渉をもたない、無名の數種の圖形を數秒間呈示し、その圖がらに對する名稱として最もふさはしいものを、繼時的に提起される無意味音聲複合（例へばキピチキ、テッペケ、ハーフホー、ロノーモなど約二十五種）中から選ばせた。その際命名の仕方に特定の型の存することが知られるに至つた。すなはち、（イ）知覺に際して過去に經驗した事物を想起し、その名で音聲複合を同化するもの。（ロ）圖がらと音聲複合との間の姿の相似を捉へて命名の據點とするもの。以上はウスナヅェにおける「聯合的」および「姿態近似」の能因に相當するわけだ。さらに、（ハ）圖がらと音聲複合との兩者において、特色ある全體的感性印象——たとへばゴツゴツしたとか、フワフワしたとか、スッキリしてゐるとかいふ感じを體驗し、その相互に照應する感性的特質の媒介によつて直下に滿足な名づけを果したと供述するやうなもの。これは前記のウスナヅェの「深層の能因」として立てたところに該當するものと思はれるが、宮崎は「さらにこの場合において、その副次的効果として情緒的狀態を伴ふ場合もあることが注意される」と述べてゐて、いはゆる「情緒的能因」をそれに包含してゐるわけだ。そしてこの種の體驗にあつては、いはゆる「被動性」Bewegtheit（ホルンボステル）ともいふべき境地を見るのを常とする。

同樣な實驗を聾者（たゞし「口話法」を習得した者）に施して相似た傾向を見出すことが出來た。この場合は音聲複合としてでなく、これをカナで記したカードを與へ、それの發音運動における特性的なものによつて名づけさせたので、その手法上の困難、特に聾啞教育者の通譯による間接でかつ斷片的な供述の解釋上の困難があつたが、とにかく

各觀察者間および聾者と正常人との間に、ある程度(三〇%)の數量的一致が見られた。さらに先天盲について、觸的刺戟として正常人・聾者の場合に用ゐた視的圖がらと同形・同大の石膏製の浮彫を撫でまはさせ、前と同樣な音聲複合を實驗者が順次に發音して、その中からそれ〴〵の圖がらによくはまるものを選ばせた。この際にも前述のやうな命名の機能のはたらくことを推定させるやうな成績を得た。

こゝに一方正常人と盲者との間の供述および數量上の一致から、同一の圖がらに對する視覺的印象と觸覺乃至振動感性的體驗との間に、緊密な照應關係の存立すべきことが考へられたと共に、他方聾者とその他の觀察者との與へた供述などに徵して、振動の聽感性と觸感性との間に親近な相似の成立することが察しられた。

如上の(イ)の命名作用の聯想的能因に對して、(ロ)および(ハ)をその感性的能因と名づけると、その價値の大小はどうか。宮崎はこれに對する解答を得るために、前記の實驗の實施後三十乃至四十日を經て、それと逆の實驗を以て吟味を施した。その結果、聯想的能因が偶然的なのに反して、感性的能因の確からしさは一層大きく、これを以てよく命名の事態に卽したものと見るべきことが判明した。*

* 宮崎美義「各種感性經驗における照應的特性について」(九州帝國大學昭和五年度學士論文)――なほ「心理學論文集第三輯」四九二―四九五參照。

ある一對の無意味音聲複合を比較して、その複合中の母音にどんな「音聲的象徵」の存立するかを見ようとする方法も、近ごろ用ゐられてゐる。たとへば glupa : glopa を比較し、これを任意に「馬」といふ意味の語だときめて、どっちが大きい馬を、または小さい馬をあらはすかについて選定させる。かうして次第に各種の母音を比較していくとい

ふ風にする。かういふ仕方で試みた一實驗の結果は、〔i〕・〔e〕・〔ɛ〕・〔æ〕・〔ɑ〕・〔u〕・〔o〕・〔ɔ〕の順序(または……〔u〕・〔ɑ〕・〔o〕・〔ɔ〕、あるいは……〔u〕・〔ɔ〕・〔o〕となることもあるが)で、小さい方から大きい方へ排列されたのだつた。* また重母音・長母音を入れて試みた小――大の比較も、ほゞ同様だつたが、明――暗について試みたところでは、〔iː〕・〔ɪ〕・〔ai〕・〔ei〕・〔æ〕・〔juː〕・〔ɑː〕・〔ɔː〕・〔uː〕の順序となつた。同様な仕方でさらに子音について小――大の比較をしたところによると、〔p〕・〔n〕・〔d〕・〔s〕・〔h〕・〔k〕・〔b〕・〔l〕・〔g〕・〔m〕・〔dʒ〕・〔r〕・〔gl〕・〔gr〕・〔br〕といふ順序を示し、明――暗の比較をしたところでは、〔s〕または〔k〕・〔l〕・〔h〕・〔p〕・〔dʒ〕・〔n〕・〔g〕・〔b〕・〔r〕・〔gl〕・〔d〕・〔m〕・〔gr〕・〔br〕の順序になつた。さらに既成のイギリス語の單語について大小をいひあらはすものを集めて、そこに現はれる母音を統計してみると、かういふ一義的な關係は到底見られない。で、大小・明暗に關するかぎり、既成言語以外の音聲複合について、よく一定の自然的對應關係を示すことが看取される。

* *Stanley S. Newman*: Further Experiments in Phonetic Symbolism, Amer. J. Psychol. 45, 53―75 (1933). これは前出セイピアの研究 *E. Sapir*: J. Exper. Psychol. 12 (1929) を引繼いで施したもの。なほ *M. Bentley* and *E. G. Varon*: An Accessory Study of "Phonetic Symbolism." Ditto, 76―89. 參照。

以上のやうな事實をどういふ風に說明することが出來るか、その可能的說明のいづれをとるべきか、その點については、さらに他の事實を併せて考慮する必要がある。たとへば小――大の順序に配當される母音の系列は、何の故にさういふ順序を示すかについて、大體同様の順序を示すものとして普通に思ひつかれるやうに運動感覺的能因、すなはち調音時における舌の前から後への位置の差異によるか、主要フォルマントの高さ(高から低へ)にもとづくか、乃至口腔の大さ(小から大へ)といふ邊に由來するかなどの設問は、問題自體の所在についての認識に徹しないうらみがある。さらに原相的心境に味到し、音聲の相好的把捉に顧み、ホルンボステルの提說を十分に念頭におくと共に、こ

の種の事實を裏づける事理一般の考察*に歩を進めて、はじめてよく解答が與へられるのだらう。

* 感性經驗の各方面に通じて共通な特性の指摘については、前記ヴェルネルの諸考察のほか、ホルンボステルの注意すべき感性の一味に關する所說があり、事は感性一般にかゝはる次第で、音聲についてのこの種の照應的事實は、その一特例に過ぎないことに留意するを要する。

五　音聲の感觸

明確に特性づけられた「純粹感覺」が、最初に與へられるのでなくて、當初の所與がむしろ漠然たる、輪郭のぼやけた、いはゞ風味として感じられるといふやうな感性體驗に外ならないことは、更新された現時の心理學において一般に承認されるところといつてよい。「感覺」はきはめて特殊の條件の下に經驗される心的內容として、心理學的な術語としてはきはめて限られた意義をしかもたない。ひろく感性經驗をその本來の面目について考察して來なくては、原相的境地における體驗の事實を正當に評價することが出來ない。こゝに感性經驗全般を、その**分極性***に着眼して見なほす必要が生じる。この見地からホルンボステルは、感性的なものがわれらに與へるところのものに、根本的二種別を區別し、一方「われ〳〵の外にある物の存在および性質」と、他方これに反對の「しかじかと感じ、何々の心もちがするといふ心境とに名づけて、前者すなはち客觀的對象的な方の所與を「知覺」とし、後者すなはちいはゞ直觀的非對象的な所與を「體感」として、それ〴〵の各異なる特色を說いた。ヴェルネルもまた同樣の見解を提案した。この「知覺」と「體感」との對立は、これかあれかの二者擇一ではなくて、多いか少いかの程度にかかはり、感性方面と刺戟條件と

態度とに依存する。感性方面のうち、ごく高度の「客觀性」を示すのが視覺的方面で、聽覺的方面これに次ぎ、漸次下降して「有機感覺」にいたつて終る。その序列の中央に位するのが觸覺的經驗で、「主觀的」と「客觀的」との分極性の相反的なあらはれが、こゝではなかり釣合つてゐる趣を示す。すなはち時に「知覺」し、時に「體感」するといふやうな「**兩極性**」がこゝに顯著にあらはれる。**

* 「ゲシタルトの問題と學説」第三輯（近刊）參照。

** *D. Katz*: Der Aufbau der Tastwelt, 1925, 17.

この點では、視覺的と觸覺的との中間に位置を占める聽覺的經驗は、大體「客觀的」に、すなはちかなりの對象性をもつてあらはれる。「おと」は普通には「知覺」されるわけだ。しかし、いつもさうなるとは限らない。自然の態度では人は、通りすぎる車を聽覺的に知覺（聽識）するが、また一方の耳の近くで振動する音叉を體感する（ヴェルネル）。あすこで鳴る琴のねを傾聽するといふ知覺が、全くそのねの中にひたるといふ體感と交互に來る場合もある（ホルンボステル）。かうして、聽覺的體驗にも、相當に兩極性があらはれる次第だ。

　前記のやうな心理學的實驗において、概念的表號として把捉せずに、その相好的表現に應じて體驗し、さうした表現の展開を記述するといふ課題で、語音系列・音聲複合を提示するとき、その體驗的事實から音聲の體感とその相好的表現特性との間に發生上の密接な關係の存立することが明かに示される。尖つた直線圖形について感得した針のやうな堅く鋭い「感じ」が、たとへば「キチピキ」といふやうな無意味の音聲複合の聽取における、またその調音運動における「感じ」に契合するし、ヒョロ／＼した、浮草のやうな圖形を以てした場合に、たとへば「ムルムル」といふのが「感

じ」の上で適合するといふ風になつてゐる。（宮崎の試みた實驗における例。後の例には聯想的能因のはたらきも見られる場合があるとはいへ、感性的契合もたしかに看取される。）

各種の感性經驗に共通にあらはれる特性として近時諸方面から考察されるに至つたものの一つは、「あかるさ」すなはち明暗だ。視覺的方面については、色相と飽和と相並んで「あかるさ」が色の感覺の屬性として立てられて來た（その他になほ往々「めだゝしさ」が數へられることもある）。ところでいはゆる八度相似性 Oktavenähnlichkeit の意味におけるおとの「高さ」（すなはちホルンボステルによる „Tonigkeit“ 音調性・律呂性」）が一切の音響知覺に與へられるのではなく、たゞ一定の振動數範圍内でこれと共變的なのに過ぎず、その振動數の多寡に伴ふ別種の現象的特性が存することを注意して、ケーレルは、從來「高さ」といふ概念の中に攝せられてゐたところから、「あかるさ」を取出したのだつた。「あかるさ」は振動數の增減に伴つて變化し、例外なくすべての音響印象の屬性を成し、たゞ一定の振動數範圍でのみ音調性と並行して進む。母音の系統は、その示現する「あかるさ」の度合によつて排列することが出來る。明るいのから暗いのへとの序列は、母音の系列〔i〕—〔e〕—〔a〕—〔o〕—〔u〕に應じる。種々の噪音の如きは、音調性をもたないのが普通だが、それ〴〵この種のいろ〳〵の程度の「あかるさ」を保つ。ケーレルは、單純振動によつて發生するおと（普通にいふ「純音」）について母音性を指摘したが、ひるがへつて各母音そのものは、かやうに種々の程度における「あかるさ」を示すことが認められる。

＊ 佐久間鼎、『一般音聲學』一六〇—一六一。なほ「現象としてのおと」（心理學研究、卷七〔昭和七〕一〇一—一一四）參照。

ある一定の樂音に對して、これと主觀的に「あかるさ」の等しい灰色をえらび、それからまたその音と「あかるさ」の

等しい匂を、きめると、かくして見出された匂と、選び出された灰色とがやつぱり「あかるさ」において等しいといふことを、ホルンボステルは實驗上示した。たとへばベンゾールが混色器圓板における白四〇度、黑三二〇度の灰色に等しいあかるさをもつし、一方ベンゾールが二二〇ヘルツ（複振動）の音とあかるさが等しいといふ場合に、音と色とについて「あかるさ」を見たら、二二〇ヘルツにおける音は白四一度における灰色と等價だつた。この當量關係は、種々の個人についてさして差異が見られない。（色盲・色弱の者については、音・匂などをいつも幾分暗い方に對當させる傾が見られる。）——「あかるさ」の特性は、他の感性方面、すなはち味・觸・溫度・振動・痛にも證明された。かうして、各種の感性方面における「あかるさ」、明暗の性質が、單に類推に過ぎないものではなくて、すべての感性過程の根柢にある共通の、すなはち「モダール間」の過程にもとづくとの想定がすこぶる確からしく考へられる次第だ。*

＊ v. *Hornbostel* : Pflügers Arch. 227 匂の「あかるさ」について、また各種感性モダリテートに無關係な「あかるさ」の神經的根據についての提說等がある。（*Lajos Székely* : Über den Aufbau der Sinnesfunktion, Z. Psychol, 127, 227—264 (1932) 特にその第二部「あかるさの知覺」による。）

一つの對象の「冷たさ」には、明るさと何程か似通ふものがあり、その一方「溫かさ」には、何となく暗さに似つかはしいものがあるといひたい（ケーレル）といふやうに、全體的相好の印象には、各方面の感性の底に一味の何物かゞある。この事は物の冷たさ・あつさについてよりも、全身に感じられる寒さ・あたゝかさなどの體驗において一層著しいだらう。空間的な擴がりについても、また同樣の感觸があつて、前述のやうな小——大に對應する音聲系列がかなり一義的に決定されるのだ。

音聲、特に母音における「あかるさ」の特性が、國語の單語の構成において重要な役割をつとめてゐることについては、すでに多少注意されてゐたところで、普通には發音時の口形の開合に着眼して說を立ててゐるが、それよりもむしろ母音の現象的特性を强調して、「イ」のきびしく鋭いのや、「ウ」の沈み、鬱するなどの氣はひを說くところに、首肯すべきものがある。前に揭げた擬聲語や擬態語の例について、母音の「あかるさ」の順序に對應して、描寫される音響乃至運動の鋭鈍や疎密の變異があり、その排列順序にすこぶる一義的なものを示すことが知られる。

なほ母音については、シトゥンプが述べてゐる現象的特性としての飽和度の如何も、音義相卽の事實において顧慮されるべきだらう。廣く厚みをおびたといふ感じは、「ア」においてもつとも著明で、「イ」——「ウ」の系列に近づくに從つて、餘裕のない、鋭い乃至薄いといふ感觸にかはつていく。

かういふ現象的特性について、從來國語における語音のうちに、いはゆる清濁の區別がたてられて、今日に及んでゐる。これを發音の機制の上から考察するときは、破音〔p〕・〔t〕・〔k〕に對する〔b〕・〔d〕・〔g〕、また擦音〔s〕・〔ʃ〕に對する〔z〕・〔ʒ〕などは、無聲對有聲の差異に外ならず、これと清音對濁音の區別とは、互に全く合致するには至らずに、不齊合を示すところから、國語音韻論における在來の清音と濁音との區別は、單に假名文字記法上の理由から生じた、本來無意味な、不適切な區分と考へないわけにいかない。たゞこの際「すむ」といひ、「にごる」といふ感觸そのものを考慮するときは、それが單に文字の記法上の理由に歸することの出來ない、むしろその記法をもとづけるといふ意味で、これより先行する因緣をもつことが想定される。すなはち聽覺的印象におけるそれ〴〵の現象的特性について、何らか互に異なるものがある所以を考察する必要がある。特にオノマトペアにおける、この清濁の相互的關係は、ある著しいもの

を示してゐる次第だ。*

* 文獻の上から見ると、古代語などには、語の頭音に「濁音」の來ることがすこぶる稀で、そこから古代日本人が「清朗」な音を好み「溷濁」の音を嫌つたもの〻やうに推定した人もある。その發音機制から見れば、「濁音」とは各種の有聲子音を先行させた音節（子音と母音との結成する熟音）に外ならないが、この有聲子音とこれに對應する「清音」における無聲子音とが、「こゑの有無」を以て區別される以外には、すこぶる親近の關係をもつこと明白で、區別の目じるしとなるその有聲の程度は具體的にはかなりいろいろになる（佐久間鼎「一般音聲學」、一一三—一二二）。これを互に區別せずに用ゐるやうな音韻體系も成立つわけで、現にさういふ種類の言語も存在するところから考へれば、前記の古代日本人云々の推測は、十分根據があるものといふことが出來ない。語頭以外には「濁音」も古くから行はれてゐたと考へられるわけで「中古の國語」本講座三〇參照）、語頭だけにないからといつて、「濁音」を嫌つたといふわけにもいくまい。近代の國語には、「濁音」で始まる單語も多く用ひられ、それに對應する「清音」ではじまる語に對して、意味の上で特殊の關係を示してゐる。（大島正健「國語の語根とその分類」第六章「濁音の用法」參照）。

すでに觀察したやうに、擬聲語における「清音」と「濁音」とは、前者が樂音的で平滑な進行を示す音響を描き出すのに對し、後者が噪音的でその進行にや〻圓滑・流暢の趣を缺くものを示す。擬態語についても、進行の有樣におけるその區別が感じられる。「すむ」といひ、「にごる」といふ感觸に共通なものがある。その一面、「するどさ」と「にぶさ」との對立も感じられる。

「清音」と「濁音」との對立が、描寫すべき音響の弱と强とに、また運動の勢の弱と强とに應じるといふのも、擬聲・

擬態の語についての所見としていはれることだが、強弱といふ外に容積、すなはち「おと」の幅・厚みや運動に參加する物・範圍の大さなどが關聯してくる。また「濁音」におけるこの種の感觸は、音響および運動に止まらず、諸種の感性經驗のうちに看取される、いはゆる「あらい・あらつぽい・ざら〳〵した」感じ*にも關聯し、その反對の「淸音」における「こまやか・すべつこい」感じと對立する。**

* 感性經驗の共通的特性としての粗滑の感じについては新しい研究がある。— *Paul v. Schiller*: Die Rauigkeit als intermodale Erscheinung. Z. Psychol, 127, 265—289 (1932)（抄錄）「心理學研究」八、六二七—六三〇參照。

** 「濁音は、淸音の精細といふ感じに對して、粗大の感じを伴ふことは、たしかである」（菊澤季生「國語位相論」〔本講座一八〕五四引用、春日政治「鎌倉時代の武士詞」中の句）。

無聲子音とこれに對應する有聲子音との感觸上の如上の差異、現象的殊別は、どこに由來するか。この際無聲・有聲の對應關係をもたない「ラ」行子音や、鼻音は、おのづから別の特性を示すが、その他の子音は、破音たると擦音たるとを問はず、一般に上述したやうな現象的特色をあらはすので、「淸音・濁音」の名稱を便宜上この後の種の子音にあてはめて用ゐても差支なからう。從つて「半濁音」の名のあるパ行の子音は、「淸音」に編入されるわけだ。

音聲の現象的特性を規定する所以の條件を機能的方面に求めるなら、內面的および外面的の二側面からの影響を念頭におかなければならない。「あかるさ」の由來を各種感性經驗に共通な大腦皮質以下の中樞における神經機能に求めることが近時の感性心理學の動向と見るべきだが、これは內面的側面の考察に屬する。外面的に音聲の刺戟作用を考察するに當つては、物理的振動過程における特性、すなはち音聲の音響學的構成の如何を知らなければならない。し

て、この方面の知見は、*母音についてはすこぶる精細に與へられてゐるものがあるが、子音については、その構成の複雑なために、十分な解明を得るに至つてゐない。たゞ、ここに述べた「清音・濁音」の現象的特性・相好的印象の差異の由來するところを尋ねるに當つては、今までの知見も相當に解明の光を與へることが出來るのだらうと思ふ。**

* 「音聲物理學」(本講座中の)に説かれるはず。

** 「音聲物理學」の知見にもとづいて説くを要する關係上、こゝには立入らない。たゞ示唆的に參照すべきものをあげると、「一般音聲學」一一九ならびに註。なほ一三二の<Blählaut>についての一節。

音聲のいはゆる音質についての特性、その相好、その感觸については、いはゆる人聲としての差等があり、個人色があることといふまでもない。その現象的な相好に名づけて、ふとい聲・細い聲といふやうなのはまだしも、さらに穿つた象徴的手法を用ゐて、われなべ聲・ねぼけ聲・どうま聲・かなきり聲などといふ。これもまた音聲心理學に於ける感觸の問題、相好的把捉の問題にかゝはる事項で、さらに性格學的考慮をも要求するものだらう。

國語における「促音」が、事實上、長子音と呼ばれるものには違ひないが、そして音聲の分割的取扱によつてその所在を見失はれるやうな種類のもので、本來の音聲の質的所與といふのでなく、むしろそのあらはれ方における事象とすべきだらうが、とにかく總束的な音聲把捉の上において儼存し、*他種の音節複合よりも時にはかへつて重大な使命を帶びてあらはれることは、見のがせない事項だ。すなはち全體的印象の上から、「つまる」といふ感じがあらはれて來ることを何人も否むことが出來ない。いひかへれば、そこに一種の緊張が感じられるのであつて、音聲の記錄上に

見出される無振動の瞬間は、局時的刺戟作用からいへば零だが、心理生理的には、その全體過程を特色づけるもつとも高度の緊張の刹那なのだ。すなはち增大した呼氣壓に抗して、音聲器官の各部に氣密 air-tight の閉塞が力づよく保たれてゐる瞬間に外ならない。したがつて、その相好的把捉にあらはれるところは、まさしくこの緊張といふ力的感觸でなくてはならない。

＊「日本音聲學」二七二―二七七。

いはゆる「撥音」、すなはち「はねる」音「ン」の感じにおける特色も、しば〳〵說かれてゐるところで、その語中における特殊の現象的相好は、また聞きまがふことのない一種の趣を感得させる。音響の描寫におけるそれの特色や、進行の躍動性をあらはすそれの獨特の味はひの如きは、現代の國語においても縱横に發揮されてゐる。これもまた、擬聲語・擬態語の語例について觀察すれば、おのづから首肯されるだらう。

これらの語中に用ゐられる「撥音ン」は、發音事態の如何に應じて、あるいは〔n〕、あるいは〔m〕、あるいは〔ŋ〕、となるが、その撥音的効果は、鼻音の音質によるといふよりも、むしろその現はれ方、特にこゝでは「おんの止め方」の特有な仕方に依存すること、促音の場合におけると趣を同じくするものがある。他の場合には、語尾などで「ン」が流れて鼻音的母音＊となることも往々あるが、この場合のやうに、撥音的効果を必要としてゐる際には、それが生じないのをも、併せ考へるべきだ。「はねる」といひ「撥音」といふ、その特色を與へる所以の音聲機能は、それ〴〵の鼻音の末尾における急激な音聲の中絕と、＊＊母音から鼻音へかけての音色乃至調子の變化とに存すると思はれる。とにかく、發音運動の樣式がこゝに大きな關係をもつてゐることは、「促音」の場合と同樣に留意すべき事がらで、特にその聽覺的印

象的効果を問題にする場合に、一層その邊の顧慮が大切になる。

* この事例によつて「ン」をフランス語などにおける鼻音化した母音と本來同様に見るのは、適切でない。試みにカンカン・グングンのやうな場合に强ひて鼻音化母音で發音してみると、撥音的効果がなくなつて、まるで別様な印象を與へる。

** 筆者は、特に[ŋ]の例について、撥音的効果の因由を急激な「聲とめ」に歸した（『日本音聲學』一六九―一七〇）が、他の鼻音についても同様なことがいへよう。

いはゆる「直音」と「拗音」との相違は、發音機制について、單に子音と母音との連接における差異といふ以外に、音節構成の根柢について考慮すべきものがある。* その聽覺的効果については、音聲の鼻音化におけると同様な効果と共に心理學的因由をもつはずのものだが、それらの點の考察は、こゝでは立入らないことにする。

* 『日本音聲學』二二四および二八〇。

以上の事例を通觀するとき、言語の發達の初期において、抽象化・概念化のいまだ著しくない時代において、新しい命名に當り、言語を創造する能因として、感性經驗の原相的境地における彼此の共通一味のものが有力にはたらいたことを豫想するのは、自然な考へ方だらう。言語の創造は、原始的心性の特色たる事物の體感的・相好的把捉の境涯において味解されなくてはならない。したがつて、言語起源論における寫聲起源說のごときも、この立場から訂正されなければならない。すなはち、オノマトペアに立脚する語源說は、鈴木朖の「雅言音聲考」における考察の原理的なものに比して、むしろ甚だしく偏局してゐることを免れない。國語の語源論における音義學派の所說も、概ね神秘的解釋を事として見るべきものが少いが、これは單語を音節に分割して、その各音節、各熟音に一々意味があるとい

ふ風に考へていつた行き方にもよる。音聲の相好的把捉による言語の創造が考へられる場合には、音聲複合の全體的印象がつねに念頭におかれるべきで、最初に單音節語が生じ、それの積み重ねによつて次第に諸種の語彙が意識的に構成されるといふ風な考へ方は、何等根據ある想定ではない。音聲と意味との相卽から語源の問題を考察するに當つては、その適用の範圍とその發生の事態とを十分に顧慮しなければならない。*

* これによつて、音義學派の所說における、取るべきものと捨てるべきものとが判然とならう。安井洋『日本語原の心理的解釋』（昭和五年刊）も、この點について幾多の材料を提供する。なほ大島正健『國語の語根とその分類』（前出）も、注意すべき試みだ。

六　音聲の聽取

すべての聽覺的現象を、「音響」または「おと」といふ名稱で總括すれば、音聲はその一種別となつて、それの聽取の心理學的考察は、一般に音響の知覺の問題を豫想した上で、進められることになる。一般に音響の物理學的考察をする音響學は、音響について二大別を立て、樂音（ね）と噪音（ひびき）とするが、音聲はこの見地からは、すべてをいづれか一方に攝することが不可能で、强ひて分ければ、母音および若干の子音（鼻音や流音など）が前者に、その他が、後者に編入されるといふわけだが、そこに異論の出る餘地もあり、* 事實上、音聲をかやうに二種に分割することが困難な場合も出て來る。そこで、樂音と噪音との中間に音聲を別に一種別と立てて、さういふものとして考察を施すといふ行き方も首肯される。

* イェンシの見解では、「母音は噪音感の種別」といふことになる。*Jaensch, E. R.*: Untersuchungen über Grundfragen der Akustik und Tonpsychologie, 1929.

音響知覺の外的條件たる刺戟作用は、物理的過程たる振動が感受器官に作用するところにあり、その振動の種別・樣式に對應して、感性印象に差異があらはれる次第で、刺戟と印象との間に、どの程度の照應が成立つかは、聽覺心理學の追究する項目に外ならない。したがつて、一方現象としての「おと」、聽覺的事實としての音響の特性を定立すると共に、他方物理學的研究によつて知られた、音響刺戟たる振動の性質とこの聽覺印象との間に成立つ關係を、種々の事態の下において考察する。しかも、こゝに刺戟と印象との間に、完全な齊合を求め得ない所以のものは、他の條件の制約がそこに心的現象の生起・變化を規定するのによるのであつて、すなはち內的條件、すなはち刺戟作用を受けこれに反應する個體の內藏する體系條件への顧慮の大切なことは當然考へられるはずの事がらではあるが、事實的探究に際してます／＼痛感されるに至る次第だ。*

* 「ゲシタルト心理學の立場」、「ゲシタルトの問題と學說第一冊」五三以下「恒常假定の廢棄」參照。なほ高木貞二「知覺の問題」（岩波講座「哲學」意識の問題）殊に三〇以下。

「おと」の印象を發生させる物理的條件たる振動そのものは、この知覺的事實の條件發生的關係から、知覺內容と共に「おと」として名づけられてゐる。直接經驗の範圍內で思念するかぎり、色が物に卽しての性質と考へられるのと同樣に、「おと」も客觀的に實在すると考へるのが自然な考へ方でもあり、普通の命名法でもあるが、科學的認識において條件發生の關係を探るに當つては、聞えた「おと」とそれの物理的條件たる振動とを十分區別しなくてはならない。*

* 佐久間鼎「現象としてのおと」(心理學研究、卷七、一〇一以下)。「再び術語について」(同誌、卷八、八七以下)。「音聲學概說」(本講座、第八)中特に「音聲現象と發生條件」の項目參照。

物理的な振動過程は、聽取者の正常にはたらく感受器たる聽覺器官に、刺戟作用を生じ、對應の神經作用を經て、「おと」としての印象をあらはすわけで、振動過程そのものは、何ら聽覺的事實なのでない。それはあたかも、某々の波長の光が、それだけで視覺的な色相なのではないのと同樣だ。この事は、何も取りたてゝいふまでもない事がらと思はれるのだが、實際に音響の問題などを取扱ふ場合に、普通には「おと」や音響に關するほとんどすべての用語を、知覺內容をいひあらはすのと同じやうに、その物理的條件たる振動の事象にも適用するために、概念構成上種々の混雜を生じ考を運ぶ上に樣々の支障をおこすに至る。

振動の姿はたゞに聽識されるだけでなくて、また觸知される。振動の觸的知覺は、また人の日常經驗する事で、特異な現象ではないのだが、これを心理學的に硏究して、その特性を明かに示すに至つたのは比較的近頃の事に屬する。これに從來說かれてゐた皮膚感覺のうちの壓覺とまつたく別種の「振動感性」としての獨自の位置を與へたのは、ダフィート＝カッツ*に始まる。カッツおよびその學徒の手により、またその他の方面からの硏究により、この問題についての知見は急激に豐富になつて來た。これと振動の聽的知覺との異同も、次第に解明されるに至つた。

* *David Katz*: Die Erscheinungsweisen der Tasteindrücke, 1920. — Der Vibrationssinn, 1923.—Aufbau der Tastwelt, 1925, 觸的世界の現象的分析から、「觸覺の二重作用」〃Duplizität der Tastsinnes〃を認め、さらにむしろ一層適切には、壓覺器官の機能と別にして振動感性を立てるべきことをカッツは力說する。この振動感性は、適切な實驗手配りでまつたく壓覺

と引離すことができる。弱く振動する音叉に指を輕く觸れると、指の皮膚面にはたらく壓力がほゞ五グラムを超えない場合にも、振動が感じられる。壓力を增して約五〇〇グラムに及んでも、依然振動の感じが生じる。これは壓覺と異なる所以の一つ。また壓の感度および皮膚の空間閾は身體局所によつて著しく異なるのに、振動は手の指先と足の趾とでも感度があまり相異しない。次にコロヂオンなどで、指先を包んで試みると、壓の感度が非常に減じるのに、振動を感じる方は、本質上變らない。壓覺は、經驗上視覺の先驅たるもので、共に靜的な體驗に屬し、振動感性は、聽覺の前衞で過程を體驗する所以のものたるところに大きな相異がある。等々。(佐久間鼎「感性心理學の新知見と聾啞教育への應用」—『應用心理』卷二、第三、四、六號所載」參照。)

聾啞も「おと」を受取り、「おと」に反應するといふと異樣に聞えるが、適切な表現を以てすれば、正常人が「おと」として知覺するやうな振動を、直接に感受するといふわけだ。この事實は、すでに古くから留意されてゐたことで、名だかい聾且盲のヘレン＝ケラーの自叙傳が有力な例證として擧げられるが、近ごろカッツとレーヴェースの二人の心理學者が檢案したズーテルマイステルの例は[*]、科學的觀察の精到さを示すもので、すこぶる注目される。

* *Katz* und *Révész*: Musikgenuss bei Gehörlosen, Z. Psychol. 99 (1926). また別刷の單行本として刊行。當時五十九歲のスウイス人 *Sutermeister* は、四歲の時から全然聽力を失つたが、音樂を大いに愛好し、殊に喜んで交響樂の演奏會に出席し、種々の樂曲の特色を判別し、かつて聽いたことのあるものは、再認するといふ次第で、その當人のいふところでは、「音波がその一切の和音とねいろとを備へて、私に向つて溢れかゝるのを感じる。身を天上に置く心地して、さながら妙音に醉つた」とある。ヘレンケラーの場合もさうだが、かうした叙述を讀むとまるで「おと」が聞えたのかとも受取られる。こ

れた研究した二人の心理學者の確めたところでは、「れ」の「あかるさ」や音調性を區別する能力は、普通人に比べるとすこぶる乏しく、彼の音樂鑑賞にはあまり重要な役割をつとめるわけにいかない。樂曲の全體的運動の範圍內で、この老人が各個の樂音に反應するのに振動感覺の判別を以てしたといふ印象を禁じ得なかつたと二氏は述べてゐる。

音響の刺戟となるべき振動を、耳を介することなしに直接に上下の齒などから骨傳導によつて與へる場合に、聾者にも「おと」を聞かせることが可能ではなからうかといふ豫想が、實驗的に檢討されたが、これはすでに「おと」として聽覺的な知覺の內容を、振動感性から判別されるやうな意味では不可能なことが知られた。* 聾者における體驗の供述にあらはれる「おと」に關するかぎりの語句は、かうして聽覺的事實を指すものと見るべきでなく、その相好的把捉における「鳴りひびく」、あるいはむしろ「振ひゆるぐ」意味を象徴するのに外ならないものだ。

* *Lambert*: Experimentelle Untersuchungen an Taubstummen zur Frage der Vermittlung akustischer Eindrücke durch das Getast, Vox 18, 21—25 (1932).

振動感性を聾啞の口話法教授上にどの程度に利用し得るかは、ある方面で鋭意研究中の事項に屬するが、すでに從來でも、いはゆる「微妙な觸知」として發聲に伴ふ喉頭の振動を手指に感じることを實際家はかなり利用して來たのでもあり、ゴールトなどの研究*は、音聲言語の振動感的把捉がすこぶる高度に發達し得ることを示してゐる次第で、相當の希望をつなぐことが出來ると思はれる。

* ゴールト（*Robert H. Gault*）の業績については、前出の『應用心理』所載の一篇參照。

しかも振動の種々相の感受の精細微妙なのにいたつては、聽感性による知覺がずつと優つてゐる。微弱なエネルギ

ーを以て營まれる物理的過程を聽感性はよく捉へ、よくその僅かの差異を判別する。おと一般の知覺の事理については、こゝに立入つて述べる餘裕もなく、事實の方面におけるこの主要な點は、從來の心理學に說かれるところを著しく訂正する必要もない。たゞし近時の實驗手法の改善は、種々の課題の解決に對して便宜な配置を提供して、活潑な探究を促してゐるので、かうして新に加へられた知見も少くない。その理論的考察にいたつては、全般の感性心理學における見地の一變と共に、大いに留意すべきものがあるが、これも、こゝに說くのにはあまり問題が大き過ぎる。*

* この問題については、筆者は近い將來に「ゲシタルトの問題と學說」中の一篇に「音響の知覺」と題して說かうとする意圖なもつてゐる。

たゞ音聲に聯關する事項で二三を述べるにとゞめよう。

「おと」の「あかるさ」については、すでに述べたが、耳に聞える限りの「おと」は、單純なものにもすでに、それぞれの明るさの度合を具へてゐる。ケーレル・シトゥンプ・ホルンボステルなどに倣つて、「あかるさ」(Helligkeit)といふが、レーヴェース(Höhe)やウォット(pitch-quality)などは、別の名稱を用ゐてゐる。これが超モダール的特性だといふこと、刺戟の側における振動數の大小に應じて變ることなどは、前述したところ。したがつて一切の「おと」にもこの特性があらはれるわけで、噪音にあつても、また音聲にあつても、もとよりこれを具へてゐる次第だ。

これに對して、樂音についてはなほ別の特性が認められる。調子のちがふ樂音の系列において相似たものを求めることが出來る。すなはち、連續的に低い調子から高い方へと推移する際に、高低の隔りは系列を通じて絕えず增していくが、音階における種々の區域のものを相互に比較するとき、ある種の相似を特定の調子の間に見出す。これを振

動數の比率についてみると、一對二のやうな關係のものに、「おと」として相似たところがある。「八度」またはオクターヴの現象として知られてゐるとほり、音樂の構成上根本的な意義を荷ふ性質で、いはゆる八度相似性だ。これを「あかるさ」に對して、「音調性」または「律呂性」と呼ぶのを適當とする（ホルンボステルのいふTonigkeitにあたる。レーヴェースはmusikalische Dualitätまたは單にDualitätといひ、ウォットはoctave qualityとしてゐる）。すなはち、各オクターヴに回歸する音樂的性質の相等性で、かの「あかるさ」の特性と十分區別することができる。

この特性は、また音樂的特性と名づけられてゐるやうに、音樂構成にとつて土臺となる種類のもので、極めて大切なのだが、噪音はまさしくこれを缺いてゐるし、音聲は子音はいふまでもないが、話された母音もこの性質をもたないと說かれてゐる。* この見解によれば、話された音聲は、「あかるさ」において上下の方向に變化するが、音樂的な調子を示さないといふことになる。おそらくある民族の言語は、他のものに比して調子の性質を缺くといふことがあらう。さういふ言語についての觀察に立脚しての所見とすれば、他の言語にはそのまゝ當てはまらない。少くとも言葉調子において音樂的なものを認めることができるとすれば（イントネーションが單に明暗の變化に外ならないといふなら格別だが）、さういふ種類の言語にあつては、話された母音の音調性がある程度で認められなくてはなるまい。

＊「一般音聲學」二一二。歌はれた母音はこの點でまつたく別だとされる。事實、話された母音が一定の調子をもつといへないで、その振動の週期が絶えず變化していくといふ觀察的事實も承認されるので、實際の話された語中の母音について、その調子の知覺を問題にすることは、適切ではあるまい。一方「話し歌」にある種の調子があると同樣に、いはゆる音樂的な言語に中間的過渡的な段階の音調性が認め得るのではあるまいか。

音叉を鳴らした場合に、これに附けてある共鳴函の共振で聞える「おと」は、いはゞ、色相に乏しい、味のないもので、普通に純音に近いといはれる。その振動は正弦振動に近い。一層これに近いものを電氣的な發振裝置で作り出すことができる。かういふ「純音」の系列を、振動の週期の大小に從つて排列してみると、その「おと」の感じにおのづから特色があり、それぞれの週期の範圍に對して母音の各種が配當されるといふ關係が見出される。これを周到な實驗的研究を以て確めたのがケーレルだつた。* かうして到達した氏の所信は、c^1・c^2・c^3・c^4・c^5のそれぞれに應じて、元本的母音〔u〕・〔o〕・〔a〕・〔e〕・〔i〕が對立するといふので、この各個の高さを「きはだつ點」とし、その相隣る二つの間にある「純音」はそれぞれ過渡的性質を保ち、〔ɛ〕の如きは〔a〕に應じるcと〔e〕に應じるc^4との中間に位するといふ風になるといふ。これがいはゆる「純音」の「母音性」„Vokalcharakter. Vokalität" で、その八度毎に元本的母音の特色があらはれるといふ事理は、「八度法則」Oktavengesetz として立てられた。「母音性」はかうして「あかるさ」と「音調性」との他に、これと相並んで、「おと」の現象的特性に數へられるに至つた。

* *W. Köhler*: Akustische Untersuchungen, II. Z. Psychol. 58, 59— (1910); III. Z. Psychol. 72 (1915)—なほ *Stumpf*: Sprachlaute, 1926. 320—參照。

「純音」における母音性を、具體的に發音された各母音と比較してみると、もとより飽和度において及ばないところがある。この事は、ケーレル自身も認めるに至つたところで、よく發音された具體的な母音が純粹な、典型的なものだといふことには、反對する理由がない次第だ。しかもなほこの見解は、具體的母音の解明に當つて、この母音性が截然たる役割をつとめることを主張する。

この問題の考察から、ケーレルの師シトゥンプは、結局「母音色のスペクトル」を「純音」に對應させることを按出した。そして具體的に發音された母音の特質は、この母音性スペクトルだけでは理解しがたいとした。こゝに活路を求めるために、氏は生理學的假說を立てゝ、二樣の中樞生理的過程を想定するに至つた。*

* Sprachlaute, 321―, なほ「一般音聲學」一六〇參照。

いはゆる母音論の二律背反として多年の論爭を續けて來た共鳴說とフォルマント說との對峙は、現時にまでも持ち越されてゐる有樣で、いづれの側にも相當の理由があり、俄に判定しがたいといはなくてはならない。大體において前者に有利な事實が多く見出されたが、反對論者にも有力な事實がないわけではない。シトゥンプの採るフォルマント區域の多少の融通性を認めれば、*二律背反もすこぶる調停されると思はれるが、問題の根本的解答は、一旦考察をさらに一層始めに引戻し、音聲器官の全體が、喉頭と口腔との二部に分れて個別的にはたらくといふのでなく、その都度全器官の緊密な統制的作業によつてそれぞれの母音の發音も行はれる所以を考慮して、出直すことが必要なのだらう。

* 佐久間鼎「母音の構造とその理論」(音聲の研究、第二輯所收)、「實驗音聲學の進步」(同、第三輯所收)、「實驗音聲學の業績」同、第五輯所收)參照。

七　音韻の體系

音聲學で取扱ふところの對象は、往々物理的・生理的に捉へ得るものといふ風に考へられがちだが、物理的な振動過程や生理的な調音(構音)運動は、それ自體音聲でもないし、音聲學の對象でもなく、これらの物理的、生理的條件から發生した、知覺内容としての一定の特性をもつところの現象的事實が、正當に嚴密に音聲と呼ばれるべきものに外ならないことは、以上說き來つたところによつて明かになつたと思ふ。

發音・發聲のはたらきは、特定の物理的な振動を生じる所以のもので、その物理的な振動は、媒體によつて人の聽覺器官に傳へられて刺戟作用を起し、聽覺的過程を生じ、かうして音聲として聞える。聽覺器官が備はらなければ音聲は與へられない、そこには音聲現象がないのだ。また聽感性の缺陷がある場合には、同一の振動刺戟に對する音聲現象が正常の場合と異なるものになる。あたかも紅綠盲に對しては、限界における光景が常人とすこぶる異なり、全色盲にとつては、それがたゞ明暗を異にする單色の寫眞的光景を呈すると同樣に、聽覺の異常者にとつてはおとの世界もすこぶる平板になる。

正常の人にとつても、それ〴〵の現象的音聲がすべて同趣だといふことが出來るかは、實證のよすがのないところだ。これはすべて、體驗の事實について逢著する問題なので、認識論的限界を成してゐる事實だ。體驗は各個人の事で、これを比較することが出來ないからだ。實際主義的にいつて、大きな不都合のない限り、これを同趣のものと豫定して步を進めることは、普通の行き方として認容されるし、さうしなくては何事も出來はしない。しかし、原理的考察にあたつては、その出發點におけるこの豫想のあつたことを回想し、反省する必要があり、これによつてはじめて誤謬に陷るのを防ぐことが出來るといふ場合も生じて來る。

すでに見たやうに、音聲がその現象的特性においておのづから親疎の關係を以て排列され、一聯の系列、または一團の體系を成す次第で、正常の聽感性を具有し、特定のおとの世界に生活して來た各個人においては、そこに各自の間に相應し照合する音響系列乃至體系の成立つことが、最大の確からしさを以て期待される。各個別のおと乃至音聲の現象は、その系列乃至體系のうちにおける特定の地位に定位されることによつて、それとして認識される。

各人において成立つ、この現象的體系は、感性的性能において正常で、まつたく共通な場合でも、その經歷の如何によつて異なることを免れない。各個の現象的事實の知覺・認識をもとづける、この體系そのものゝ殊別は、同一の刺戟による感性事實をも別異の現象とする。色彩の認識における、しろうとの見るところと、畫家の見るところとは、同一景觀に對しても異なるものがある。音聲的事實の認識においても、同樣なことがある。すなはち、特定の態度によつてこれに對する音聲學者の所得は、同一の客觀的事態における普通人の聞きとるところと相異なるわけだ。音聲學的態度において用意されてゐる音聲的體系は、音聲學的に定立され、專門的教養として習得された國際共通のもので、その中に占める地位によつて、その都度與へられた個別的音聲は措定される。こゝに音聲は、一應それ〳〵の單語として結成されて語義を保つといふところの制約を脫し、それ自體として措定されるわけだ。

もちろん、各個人における音聲言語の發達に伴つて、その當初與へられる音聲體系は、かういふ種類の精細な規定を示すものではない。語義を荷ふそれ〳〵の單語を、異なる語義のものから區別するといふ點に、まづ音聲のけぢめが認められる次第だ。すなはち、それは各人の母國語における、さらに限定すれば、その用ゐる方言における、必要で十分な音聲體系だ。さらに嚴密にいふならば、各個人の使用する言語において彼此區別を立てられ、排列されたや

うな音聲體系なのだが、言語が、その際多く母國語として、また方言として社會的公器たる性質上から、ちようどその言語的區別を可能にする程度における音聲的體系の成立にも、社會成員を通じて共通なものを示すことになる。音聲學者における精細化された音聲體系も、當初與へられるこの種の各國語について成立する素朴な音聲體系から出發して、次第に分化發達させていつたものに外ならない。

この各國語乃至方言に即して成立する單純かつ素朴な音聲の體系を、特に「音韻の體系」といひ、これを研究の對象とする學科を「音韻論」といふ。各地の音韻體系を比較して、そこに法則的なものを見出すことも期待されるが、これは比較音韻學と名づけるべき一個の科學を成す。

＊　今日の國際生活において、各種の外來語が各國語の中に相當の役割をつとめ、その音聲的特色ももち込まれるに至るときは、音韻體系そのものも變化せずにはゐないわけで、この勢が極度に進展する場合には、各國語の音韻體系が國際的音聲體系に近似していくことを考へるのも可能といはなければならない。これはもとより現在の狀態において特に考慮を要する程度に及んでゐるわけではないが、原理上その可能性を認めることは、問題の見通しをつける上には大切だらう。こゝに「音韻」はボドゥエン＝ド＝クルトネ(*J. Baudouin de Courtenay*)の用語における "phonème" に照應するし、「音韻論」乃至「音韻學」は "phonologie" に對應する。

近來トルベツコイ *N. Trubetzkoy* 等の提唱する音韻學的研究の重要義が次第に世界の學界に注意されるやうになつたが[＊]、その見解は、すでに先驅的にフェルディナン＝ド＝ソシュール（*F. de Saussure*）およびボドゥエン＝ド＝クルトネの所論において見出される。ド・ソシュールはすでに言語における、「意味するもの」が無形・非物質的であり、言語

にとつて重要なものが音聲そのものではなくて、音聲的反對・區別に存し、音韻がそも〳〵一體系の各成員としてでなくては存立しないことを示した。方法論的見地から、語言と話言（la langue et la parole）との間に嚴重な差別をおき、一語言（各國語乃至各方言）を一つの體系として、それの各分子は當然全體系への顧慮の下に研究すべきものとした。しかし、この理論的建前を以て音韻の方面に新しい開拓の鍬を入れることは、氏およびその學派、いはゆるジュネーヴ學派について見られなかつた。興味の向ふところが、こゝでは語義や結語法の方面にあつたのだつた。理論的の考想が、これから進むべき研究の方向を指示したのだが、音韻の事實について探究を試みることがまだ實行されなかつた。氏における「フォネーム」といふ用語も、今日音韻學者が「音聲」または「單音」に對してはつきり區別してゐる意味で用ゐられたのではなかつた。*

* 一九三一年ジュネーヴに開かれた第二回國際言語學大會で、討議の論題になつたことは、千葉勉氏の報告書に見える。音韻學的研究に對する國際協會が、この時公認されたのだつた。

ポーランドに生れ、その生涯の大部分をロシアのカザン、のちペテルブルグの大學教授としてすでにしたボドゥエン゠ド゠クルトネは、「フォネーム」に今日用ゐられる特定の意義を賦與し、當時の音聲學の對象とした「音聲」と、まつたく類を異にする所以のものをそこに認め、音聲學に對して別個の科學たる「音韻學」の成立を、方法論的に確定したのだつた。氏の力說したところは、體系の概念よりも、むしろ「音聲」と「音韻」との辨別にあり、その音韻についての具體的探究を念としたところに、功績の認めるべきものがある。氏の與へた「音韻」の定義は、今日から顧みれば適切とはいへない。「音聲の心的當價」として「フォネーム」を見、「音聲」を取扱ふべき「生理音聲學」に對して、これを對象と

すべき學科を名づけて「心理音聲學」としたやうなところに、用語ならびに科學の分類についての見解に適切を缺くものがあつた。音聲をもつぱら物理的・生理的の事象と解するのは、究極において支持しがたい考へ方で、音聲と音韻との相異は、物的と心的との對立に歸すべきものではない。さういふ點で批評されるが、具體的な探究において、氏の學徒が進んでいつた業績に對しては、この定義上の缺陷は格別有害な効果を與へるほどのことがなかつた。

一九二八年ハーグにおける第一回國際言語學會には、音韻體系の研究に關する提案が、トルベツコイ等のロシア言語學者の一團から提出され、各國の言語學者殊にプラーハ言語學團がこれに興味を以てこの問題に向つて進出し、第二回大會までにこの學團は主として音韻學に關する數卷の研究業績（Travaux du Cercle linguistique de Prague）を發表して、つひに世界の言語學界の視聽をあつめるに及んだ。かうして具體的研究の成果を得る一方、先行者の成就したところを超えて、さらに大きな言語科學上の新展望を築くに至つた。現時の「音韻學派」の主張するところは、前記の各國語において特色ある體系を成立させた音韻の全體的結構をいつも考察の對象とし、個別的なものをその體系的背景から理會するに努め、音韻の定立を、語義を荷ふところの單語間の語としての差別の可能性に求めようとするにあるといへよう。各國語において、單に音聲だけを切離して觀察したのではない、語義を荷ふ單語に卽して、その區別の目安となるところに「音韻」の言語學的な重要義を認め來つたのは、その一面の功績であり、「音韻學的對當」une opposition phonologique がこの立場からは次のやうに定義されるのだ。——いはく、與へられた一國語內で、理知的意義の分別に役だつに堪へる音聲的差異、と。これはわが國語についていへば、「清音」對「濁音」、「直音」對「拗音」、「短拇音」對「長拇音」、また「促音」とそれに對する「つまらない」音などの對當にあたる。いづれの音韻學的對

當でも、その各項が「音韻學的單位」であつて、「フォネーム」とは、さらに一層小さく、一層單純な音韻學的單位に分解されることがないやうな一つの音韻學的單位なのだ。

かうした單位たる「フォネーム」は、一國語の音韻學的體系（das phonologische System）に準して、はじめてその「言語學的價値」（ド＝ソシュール）をもつのだし、その體系の外に取出して考察することは無意味なのだ。「フォネーム」を定立するとは、音韻學的體系の中におけるその位置を示すことなので、それはこの體系の結構を考慮せずには、不可能なわけだ。そこで、音韻學者の着手點は、その全容における音韻體系にこそ存する次第で、この音韻體系から出發してこそ、個別的な「音韻」＝「フォネーム」に達するのだ。

かうした見地から、音韻學的體系の結構と「語彙音韻學」phonologie lexicale とが考察されるが、それにとどまらず、一切の音聲的對當の言語學的機能が研究題目となるべきで、かうして前述の學科のほかに、なほ「語態音韻學」phonologie morphologique（あるいは morphonologie）および「結語音韻學」phonologie syntaxique が成立すると主張する。これらは音韻學の分科として、各自興味のゆたかな問題の分野を形成する。詩形論や文語の形成に關する考察や方言學に對する關係や語音と文字との交渉等も、またこゝに新しい景觀を展開する。應用的方面にも、言語教育などにおいて顧慮すべきものがある。*

* 以上 *N. Trubetzkoy*: La phonologie actuelle. J. de Psychol. 30, 227—246 (1933) による。かの「聞きちがへ」の問題の如きはこの邊の考慮によらなくては解明しがたい事がらに屬する。「日本音聲學」中「音聲の心理」の項參照。

かくて、現時の「音韻學派」は、一個の注目すべき學術的運動を學界に生起せしめつゝある有樣で、その進轉は張目

すべきものがある。音韻の考察に關する誤り、その目標とするところに、音聲にあたるものといふべきだ。しかし、すでに述べたやうに、「音韻」に對立させた音聲・「音韻學」に對立させた音聲學に對するこの學派の見解については、原理上同意しがたいものが多い。在來の音聲學は、元子化的な考へ方をとり、體系的全體への顧慮を缺く傾向を示したでもあらう。その點の批評には、是認すべきものがないではない。しかし、音聲現象についても、その十全な理解は、かうした行き方では遂げられないこと、上來しばしば縷述したところだ。音聲學にあつても、音聲體系の結構において個別的音聲が定位されるのであり、たゞその際一國語の内部における音韻體系ではなくて、心理學上聽感性に内在する法則性によつて規定される別個の體系が考慮されるはずなのだ。聽覺的機能・聽感性の特質を閑却しては、音聲體系の結構が定立されはしない。音聲器官の生理的機能如何が、決して一義的に音聲現象を決定するものではなく、波形や音響學的構造も、たゞ現象的特性を規定する一方の催因たるに過ぎない。個別的音聲の認識、それとしての措定は、すでにたびたび述べたやうに、いはゞ各個人に内藏される音聲體系のうちに、外來の印象がその地位を得るに依つて可能になるのだ。（普通の場合にはその音聲體系が各國語における音韻體系なのだ。）

一國語・一方言の内部における音韻體系の定立は、言語學的意義をもつことを認めるべきだが、全般的音聲體系の存立もまた別な意味で學的重要性をもつ。音聲に對する新興心理學的な考察は、かの音韻學派の音聲學に對する偏見を訂正して、かへつて在來の音聲學における原理的考察の缺陷を音韻學者をして指摘せしめ、これを反省せしめる結果を招致する。實に原理的根柢において、兩者は相通じる。音韻學の主張が、面目を更改した一般音聲學の地盤の上に、その支持を得るといふのが、究極期待すべく、到達すべき境地なのだ。

八　音聲の成態

單獨に發音された音聲振動について力學的測定を施すのは、音聲物理學の任務とするところで、その個別的な發音運動の生理的機構を明かにするのが音聲生理學の試みる研究に屬するが、これはいづれも研究事態の簡單なものを選んで、そこから出發しようとするための用意から來るので、たとへば母音の特色を見ようとして、一定の調子でうたはれたものを捉へてその波形を精密に描錄し、これに「協和分析」を施して、音響學的構成を知るといふやうに進むのも、さうした意圖に出るものに外ならない。これによつて話された母音の性質を推察することは許すべきだが、これはこれとして異なる特色をもつはずと期待すべきものだから、單なる推察を以て終始すべきでなく、さらにこれを具體的に直接に研究の爼上にのぼせなければならない。その研究の結果を比較考量して、はじめて兩者の間の異同が確められるわけだ。單獨に發音された場合の音聲現象の知見を以て、たゞちに一切の音聲の現はれ方の根據とし、これに歸して他を說明しようと試みるのは、特定條件の下に發生した事象を他の條件下においても當然發生すると豫想する先入見に囚はれるもので、事實的探究に對してはすこぶる不都合な態度といはなくてはならない。

從來の音聲學的考察は、往々この種の豫想を暗默のうちにとり入れて進み、發音器官における特定の調音域における一定の仕方で單獨に發音された場合の音聲現象を考察して、そこに音聲學的認識の根據を求めようとし、まづ單音を分離してその特性を定立し、これの連接として具體的な音聲の成形を解しようとし、音聲の流動の波形記錄について、各時間點による區分を試みた。スクリプチャ（*Scripture, II. II*）の元子化的取扱の如きは、その典型だらう。かう

いふ仕方で進むときは、顯著な現象的事實たるアクセントの問題の如きも正當に理解されないだけでなく、つひにはアクセントそのものの存立を否定しなくてはならないやうなはめに立至る。音節の事項なども亦同樣だ。

これは科學的、特に自然科學的な行き方が、もつぱらこの種の分析的手法によると盲信するところからも由來したのであらう。科學的であらうと欲した音聲學者の側において、原理的考察を缺いてたゞ自然科學の皮相を模倣した嫌があり、往々この弊を見るのに對し、言語の現象的事實を眼中におくべき立場にある言語研究者は、多大の不滿を感じないわけにいかなかつた趣がある。これはひとり音聲の考察に限らない。克明な、精密な分析的研究が正しい方針の下に行はれる代りに、不毛な設問の下にいたづらに機械的に反復されるのに對しては、批判的態度をとる側からの批議と輕侮とは、免れがたい次第で、見かけ上の精細さを以て科學的を標榜するのに對しては、勢の傾くところあるいは分析を全般的に排斥して、全體觀的な立場を高唱するといふことにもなる。心理學における要素心理學をめぐつての、種々の立場の抗爭は、この邊の消息をもつとも雄辯に物語るものだらう。*

* 佐久間鼎「ゲシタルト心理學の立場」（「ゲシタルトの問題と學說」第一輯）およびケーレル著「ゲシタルト心理學」（佐久間譯）參照。なほ從來「形態心理學」の名のもとに行はれた紹介のうちには、すこぶる誤解を促して、心理學における現時の事態の見通しをかへつて妨げるに過ぎないものがある。

一個の音節に結成された音聲的成形は、その全體に即した特性を示し、これを切離して發音した場合のその成素たる子音および母音のうちに求め得ないものがある。子音と母音とが單に相繼いであらはれ、ある一つの時間點において交代するといふ風に考へるべきではない。「いま音聲の連續を、その構成分子たる單音の連接結合によつて說明す

る(從來の音聲學に)普通の考へ方を以て進むにしても、その結合の成果たる連音は、各の單音が單に前後に並列し相續すると考へるべきではなくて、そこに單音の間に、ある種の交錯・滲透が生じると考へなくてはならない」(「日本音聲學」一九九)。一音節「パ」のやうな「異器官的結合」の場合には、母音「ア」の調音、すなはちその咽頭における特有の狹まりや、それに伴ふ舌面の低まりのやうな舌の構へは、普通の場合には最初から(むしろ破音〔p〕に先だつて)用意されてゐる。この際「こゑ」がどの時間點からはじまるかを、描錄曲線についておほよそ決定することが出來るが、發音機構について「ア」が〔p〕についであらはれる時間點を定めようと努めるのは、無益な骨折に終る。「アオ」のやうな「同器官的結合」にあつては、舌の位置は漸次的に變化していくから、また「ア」と「オ」との境界の劃定は、精細には不可能なのだ。

いはゆる定位音と渉音(わたり)とを區別して、かの二重母音の副音を「わたり」と解するやうな仕方も、出發點において單音を立てゝ、それの連接として音聲の成形を說かうとする普通の音聲學の建前からは、與へられた事實に適合するための用意として、必要な事がらとなるが、原理的には二重母音をこの二種の音聲の連繫として認めるのと、「動的母音」kinetic vowel*として認めるのとの間に、いづれを是としいづれを非とすべき所以を見出さない。たゞ普通に發音された「海軍」などの「アイ」を、單獨に發音されたままの「ア」と「イ」との並列と考へるやうな行き方は、事實に反するものだ。單に舌の高まりといふ點を考慮の中においても、こゝに「イ」を以て示された音聲部分では單獨に發音された「イ」における舌の位置まで高まらないのを常とする。これを「わたり」といふも可、この場合の「アイ」を一單位として動的母音と名づけるも可、要はその全體に卽してあらはれる特徵を十分に認識するにある。**

* パーマ氏等がイギリス語の「二重母音」に對してこの名稱を與へてゐる。*H. Palmer*: Grammar of Spoken English.

** 「日本音聲學」二〇二—二〇四。

單音も、音節も、**それぞれの段階における音聲單位**で、さらに大きな音聲複合を分節するによつて到達される分析した個別的全體だ。わが國語における音韻意識は、音節的單位までの分節を容易に遂げしめたもので、五十音圖における個々の音といひ、一音一義などを唱へる音義說の一音とするところは、すべて熟音ともいふべき、この結成された音節單位を指すものだつた。具體的に與へられたこれを單音の連接と見るのは假作的考想だが、その場合には、その結合における緊密さの大きいことを考慮する以上に、その全體に卽して示される特性を十分に顧みなければならない。それは原理上もとより個々の成分において存せず、結合によつて忽然生じたといふものではない、與へられた全體に卽して存立するのに外ならない。

さらに大きな單位としての「音聲學的單語」については、その全體を特色づける性質が見出される。一つの意義を荷ふ單語を他の意義を荷ふ單語から區別するところの音聲的モルフェーム*として、アクセントの問題は、音韻學界の課題ともなるのだらうが、音聲心理學はまさしく音聲における意味を考察し、また語義に卽する音聲事象を攻究するところの使命から、**一種の音成態** Tongestalt **たるアクセント**をその研究課題とすべきはずだ。

* 「アクセントは、またすこぶる大切なモルフェームで、ある語音(國語)では單語の形態的價値を定立するに與つて力がある。こゝでアクセントといふのは、まづ高さアクセント、調子のことゝ心得るべきだ。」—*J. Vendryes*: Le language, 1921. 9).

アクセントが一つの典型的な音成態たる所以は、ゲシタルトにおける一つのエーレンフェルス準度によく合致する

ところに明かに看取される。しかもフォン＝エーレンフェルスがゲシタルト性質の考察に當つて好適例として提起した旋律と同等に、あるいはむしろそれ以上に、アクセントにあつては移調可能性が存立するのだ。かく「ほとんど局限されずに移調可能性を示すところに、アクセントが十分にゲシタルトたることは認められるはず」で、そのアクセントが、それ〴〵の場合に處して、どういふ風に保存され、また場合によつてはある方向に轉向されるのに、果してどの方向に赴くかについて、嚴密な法則性に從ふことは、わが國語におけるアクセント事象について明示されたところだ。この音成態たるアクセントの保存および轉化の法則的事理についてゲシタルト法則の一面を看取することが出來る。*

* 佐久間鼎「アクセントにおけるゲシタルト法則」（「心理學論文集」第三、昭和六年刊）。

音聲心理學の埒内において考察すべき重要な問題として、音聲の成態についてなほ立ち入つて述べるべきだが、筆者の見解はすでに別に述べたものがあり、本講座中にも國語のアクセント現象などについては適當に說明を與へられるだらうから、こゝには省略する。なほ大切な事項としては、發音における調整 Coordination の事項や、病理的現象などがある。たゞし、本稿のプログラムでは、しばらくこれを除外した。

筆者のことば

「音聲心理學」の標題は、筆者も豫期しなかつたところ。何の內容を盛るべきかについて、實は腹案を練つた。音聲の認

識な問題とするに及んで、この見地における考察の重要性をはつきり看取するに至つた。幾多の重要な、しかもまた興味ゆたかな事項が、在來の音聲學では取扱はれずに殘され、言語學からも適切な顧慮を拂はれずにゐたことがわかつた。さういふ諸事項について述べるために紙幅を費したので、この項目の下に當然取扱はるべきアクセントなどの問題を、當初の豫定にもかゝはらず、割愛しなければならなかつた。（ただしそれは、既刊の著書に求めることができるものではある。）「音聲心理學」の輪郭を描くべき課題に對して、こゝに提出した答案が、果して金的を射當てるものかどうか、筆者は自ら知らない。たゞこの御膳立における新鮮味と榮養價とが、讀者の學的食慾を亢進させ、智的體力を増強させるに幾分かを寄與するものであらうと豫期し、かつさうありたいと希望する。

昭和八年八月二十日印刷
昭和八年八月三十日發行

國語科學講座
（第三回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院